

深く、突き刺せ

鬼風神GO

\*

ジャックはとくいまんめん、こう言いました。

「おあいご用さ。おれに開けられない鍵はない。そのかわり一つ条件がある」

「そうかそうか。分かった。お前の好きなものをどんなものでも与えよう」

「ありがとう。それでは、お城一番の宝物をよこしてもらおうか」

「うーむ、『千の瞳』か。しょうがない。王様に伝えておこう」

「違うよ、お大臣さま。もっともっと素晴らしいものがあるだろう？」

「それではなんだというのだ」

大臣は両手をおおげさに広げ、疑問を投げかけます。もう頭がはれつしそうです。ジャックは一日が終わってしまいそうなほど長い間をおき、こたえました。

「お姫さまだよ」

大臣は声も出せず目をまんまるにしてジャックを見返すことしかできませんでした。

## フラッシュバック

「あんた何言ってるの」

佐藤さんの言葉は明らかに怒気を孕んでいた。当然だろう。色白でモデルのように整った顔立ちをしているが、肌は荒れ、ほうれい線がやけに目立って見える。何より深く刻まれた眉間の皺が彼女の印象を決定付けていた。

発言をした当の本人である安藤さんは普段通り、お目当てのテレビ番組の前のニュースを見ているような何の感情の起伏も感じられない淡々とした表情をしている。

「安藤さん、それはやばいすって」

純が焦った様子で仲裁に入ろうとするが、こんなチャラ男が安藤さんの気迫に勝てる訳もない。

「子供は児童相談所で預かってもらったほうがいいと言っているんだ。意味が分からなかったのか」

「何で預けないといけないのよ」

「虐待しているからだ」

安藤さんのその声は重々しく室内に響いた。佐藤さんはこれ見よがしに大きなため息をつき、マフラーを首から外し、こちらに背を向け、冷蔵庫の前に座り、持っていた買い物袋の中身を入れ始めた。いや入れている、というよりも突っ込んでいるという表現が正しい。そういう性格なのかテーブルの上もマヨネーズやソース、食パンやお菓子などが無造作に置かれている。

「しつけよ、しつけ。ほら、お金払うから帰って。ていうか保奈美はどこよ」

財布からお札数枚を取り出し、床に放り投げる。

「隣の部屋で寝ている。しつけど？ 度を越している」

様子がおかしいことは最初から気付いていた。ボサボサだったので髪の毛を触ろうとしたとき、弾かれたように身体を反応させたり、何をすることもこちらの顔をうかがっていたり、まだまだあどけない顔には似合わない行動だった。袖をたくし上げると腕には痛々しい青痣があった。極めつけは左頬にある縦に入っている傷跡――。

気がつくわたしは口を開いていた。

「何でほっぺたにあんなことしたんですか。一生残るんですよ」

佐藤さんは半開きにした憎悪のこもった目を今度はわたしに向ける。安藤さんのようにはいかない。少し後ずさりしてしまった。

「あんたたちさ、頭おかしいんじゃないの。何が便利屋よ。子供の世話頼んだだけでここまで責められて。警察呼ぶわよ」

声を張り上げる。窓がビリビリと音を立てた、気がした。

「そのほうが好都合だ。悪いのはどちらかはっきりするだろう」

安藤さんはあくまで戦う姿勢だ。これからどうするのだろう。まさか無理やり保奈美ちゃんを連れていくわけにもいきまい。

「毎年の児童虐待の相談件数を知っているか」

「.....知らないわよっ」

冷蔵庫を力任せに閉め、佐藤さんは怒りが限界に達しているのか拳を床にどん、と叩き付けた。

「四万件以上だ。年々増加する虐待の相談件数、児童虐待に世間の目が向けられるにつれ、法律は改正され、一定条件を満たせば強制的に立入調査までできるようになった。何件だと思う」

「何がよ」

「強制立入だよ」

「だから」佐藤さんは立ち上がり、大きな足音を立てそのまま安藤さんにつかみかかった。「知らないって言ってるでしょう？ あんた本当なんなんだよ」

慌てて純と止めに入るが、案外力が強く引き離すことができない。安藤さんは意に介すことなく、話を続ける。

「たったの二件だ。法律が改正され、児童相談所の権限が強化された最初の年の数だ」

「黙って。黙りなさい」

「.....さん。お母さん」

保奈美ちゃんが部屋に続くドアの前に立っていた。この騒動で起こしてしまったらしい。

「保奈美、部屋に戻ってなさい」

「何かあったの。何でけんかしてるの」

「いいから。戻ってなさい」

「いやだ」

トコトコと小走りし母親のもとへいき、足にしがみつくと。しばらく娘を見つめたあと、佐藤さんは勝ち誇ったような表情で言った。

「ほら、この子はわたしと一緒にいたいのだ。帰って」

「だめだ。もうこちらに向かっている」

誰が、と言おうとしたのだろう。しかし佐藤さんが発しようとした言葉は緊迫した状況にはそぐわない、ピンポン、と間の抜けた音に遮られた。

「鍵開いてるからそのまま入ってきていいぞ」

「お兄ちゃん」

現れたのは、わたしの兄だった。

「おう深雪。びっくりした？」

いつもの暴力的なまでに無邪気さあふれる笑顔だ。紺色のストライプの入ったスーツに身を包んでいる。

「何してるの」

「あれ言ってなかったっけ。児童福祉司なんだよね、俺」

「ジドウフクシ……？ 公務員としか聞いてない」

「ごめんごめん。ま、そんなことより」ゆっくりと佐藤さんのほうへ身体を向ける。「佐藤和恵さんですね。お子さんへ虐待の疑いがあると判断しましたので、お子さんの状況を確認に伺いました」

笑顔はそのまま佐藤さんに言い放つ。

「は？ 何言ってんのあんた。状況なら、ほら、私の子供はこの通りなんでもないわよ」

「近隣の方からこの部屋から子供の泣き叫ぶ声、女性が大声で怒鳴っている旨の申告を数件頂いています。そういった声を受けて私共で話し合った結果、今回の訪問となりました」兄が真剣に話している。普段はおちゃらけているので別人を見ているような不思議な感覚だった。「突然の訪問でこのようなことを言って、不快な思いをさせてしまい申し訳ありませんが、一度落ち着いた場所でお話しをお伺いさせて頂きませんか」

「なんでいきなり命令されて、こっちが足運ばなくちゃいけないの」

保奈美ちゃんは佐藤さんのスウェットのズボンを握りしめ、事の成り行きを見守っている。今にも泣きそうな表情になっていて胸が痛む。

「こちらの告知書にサインをお願いできませんか。よろしくお願いします」

兄が差し出した用紙は無惨にも叩き落とされた。

「だから、ふざけんなって言ってんだよ！ ずかずかと勝手に家に入ってきて、出頭しろだあ？ 訳が分からねえんだよ」

保奈美ちゃんは泣き出してしまった。あーん、あーん、という恐怖と動揺が混じった声がしばし部屋の中を支配する。

「本当に何も分かっちゃいねえようだな」

突然安藤さんが動いたかと思うと、佐藤さんの両肩をつかみそのまま壁に激しく押し付けた。きゃっという佐藤さんが悲鳴を上げる。

「あんたの娘がどんだけ痛かったか知ってるのか」

保奈美ちゃんが安藤さんのカーゴパンツに抱きついて必死に止めようとしている。

「安藤さん」

腹の底に響く、耳の片方からもう片方へ突き抜けるような大声だった。わたしはまた兄の「初めて」を知る。

「やめてください」

安藤さんは保奈美ちゃんの手をそっと振りほどき、小さく舌打ちをしてこちらへ戻ってくる。佐藤さんは少しの間放心状態だったが、力が抜けたのかそのままずると座り込んでしまった。警察に、警察に連絡するから、と、か細い声でつぶやく。

「乱暴なことをしてすみません。謝ります。でもこれだけは分かってほしいんです。私はあなたを攻撃しようとしている訳ではありません。……これを見てください」

兄は鞆から取り出した何かを佐藤さんの目の前に置いた。写真のようだ。佐藤さんがそれを見た瞬間顔をしかめた。

「なにこれ」

「ある男の子が父親から虐待を受けていたという証拠を示す写真です」

わたしは恐る恐る近付いて、写真をのぞき込む。一枚は細い背中に対角線上に真っすぐの赤い線が入っているもの。別の一枚は手の甲にいくつもの周りとは比べ色素が薄くなっている丸い痕がおさまっていた。煙草を押し当てられたのだろう。

「だから何なのよ。私は虐待はしていないって言ってるでしょうが」

「仮にタロウ君としましょう。父子家庭で、タロウ君に危険が及ぶと判断し、タロウ君を施設で預かることにしました。父親には何度か面会の後、私は問題ないと判断し、二人は再び一緒に暮らすことになりました」

佐藤さんは何かを言いたげに口を開きかけたが、兄の有無を言わさぬ態度に観念したのか話を静かに聞いている。

「それから一ヶ月もたたない内にタロウ君は歯が折れるほど暴行されました。全治二ヶ月で、今も入院しています」

静寂が落ちた。保奈美ちゃんが母親に再び抱きついた。わたし達は身じろぎ一つできなかった。兄が後を続ける。

「繰り返したくないんです。佐藤さんお願いします。一度一緒にお話しましょう」

「あの……、わたしからもお願いします」自然と声が出ていた。「ほら、純も。……安藤さんも！」

嫌がる安藤さんの頭を押さえつけ、一同で頭を下げる。少しだけ顔を上げると口をとがらせた佐藤さんが兄に手を差し出し、ぶっきらぼうに言った。

「告知書ちょうだい。どこにサインすればいいのよ」

「あ、こちらです」

兄が佐藤さんに近寄ろうとしたとき、半身がテーブルに当たりソースがこぼれた。

あ、ごめん。ふきん持ってきます。兄と純が発した言葉がえらく遅く、エコーがかって耳に響いた。呼吸が苦しくなる。息が吸えない。わたしの目の前には一つの記憶が、映画館のスクリーンに映し出されたように再生した。そしてそこには安藤さんが――。

「え」

驚きが声に出ってしまった。

「どうした？」

安藤さんが不審げにたずねてくるが応えられるはずもない。

「ううん、なんでもない」

なぜかソースがこぼれたことで呼び起こされた記憶は一瞬で消えた。呼吸も問題ない。ただ脳裏にはしっかりと焼き付いている。

母が父に殺されたときの記憶で間違いないはずだ。まず時計。今はその家に住んでいないので懐かしい。一時間たつごとに鳩が出てきて、時を知らせてくれるのだが、いつの間にか壊れていて、ジジジ、という音しか出なくなっていた。細長い棚の上には当時流行っていてアニメの主人公のフィギュアが置いてある。わたしの家だ。でも、なぜ安藤さんが血だらけの包丁を持っていたのだろう。

「安藤さん、ほんと勘弁してよ。下手したら警察呼ばれてたかもしれないよ」

「ふん、別に呼ばれてもかまわない。悪いことをしていたのはあいつのほうだからな」

「あいつとか言わない。ったく、偶然俺らが佐藤さんへの出頭要求について話し合っていたからよかったものの」

端から見ればけんかをしているように見えるだろうが、日常の光景だ。

先ほど一瞬だけ見た記憶の断片が頭から離れなかった。何かの間違いだと思い込もうとしても無駄な行為だった。

「深雪、今日のご飯何がいい？」兄がわたしの顔を覗きこむ。「あれ、どうした？ 思い詰めた顔して。せっかくの可愛い顔が台無しだぞ」

兄はマザコンならぬシスコンである。母を失ってからは安藤さんと兄が親代わりとして何かと感謝をしているが、とびっきりの笑顔と猫なで声で毎日迫られるといい加減うんざりする。

「……何でもない」

「何でもなくないよ。どうした？ 返答する前のちょっとした間は。兄ちゃん気になるなあ」

大げさな仕草で首をかしげて人差し指で頭を指し、心底不思議に感じているという演技をして、まくしたてる。

「もう、うるっさい」

「……怒った？ 怒ったのか深雪！」

「ほんとめんどくさい。先帰ってるから」

わたしはわざと、どんどんと足を交互に踏み出しながら歩き出した。

「おい、待ってくれ」

「こういうときは追いかけんな」

「安藤さんやめろ——」

安藤さんが止めてくれたのだろう。慌てた兄の声はすぐに聞こえなくなった。

思考することに疲れた。あまりにも突飛すぎることでどう整理をつければ分からない。とりあえずこのことは兄に聞いてみよう。あの事件のことはさすがの兄でも口が堅くなる。もちろんわたし自身も聞きづらいことではあるが、しかたない。

ようやく周囲の景色が目に入ってきた。海へと続く大きな川を眺めながら歩くことのできる河川敷はわたしの日常であり、楽しみでもあった。春になれば花が咲くし、夏になれば花火大会や多くの人がバーベキューに興じたりにぎやかになる。秋や冬はつまらない。どこかの街を歩くよりも風が身体にぶつかってくるし、視覚的な変化に乏しい。

最近の各テレビ局の天気予報は連日、呪文のように真夏日で熱中症になる危険性を声高に叫んでいる。

自宅は河川敷を背にするように建っている。幼い頃は毎日母におぶわれて夕陽を見に行っていた。わたしが幼稚園のときだ。燃えているようで、でも何だか見ていると悲しい気持ちになったりして空に滲むように地平線に沈んでいく太陽を見ていると、神秘的なことに遭遇しているよ

うだった。

—おかあさん、太陽さんはどこに行くの？—

—深雪は夜眠くなるでしょ？ 太陽さんも同じで眠るために沈むの—

—いつか見にいきたいな—

—ええ。行きましょう。太陽さんいっぱいいるから楽しみね—

—え。たくさんいるの？—

—そうよ、知らなかったの？ 毎日照らしていると疲れるから交代でやってるのよ。お母さんは水曜日の太陽さんが好き。深雪は？—

母と話しているときはいつも別世界に行くことができた。彼女の思考の根底には常にファンタジーがあり、目に映る風景にはいつも湖には恐竜がいて、空には円盤が飛んでいた。

母は魔法をかけることもできた。わたしが貝のアサリを嫌がっていたときのことだ。

「これからお母さんがアサリを好きになる魔法をかけるわ。でもこの魔法はあなたが二十歳のときに解けるわ。それからはあなた自身の力で食べるのよ」

そう言うなり、わたしの額に母のそれを合わせ、聞き取れないほどのかすかな声で呪文のような言葉をつぶやき、最後に背中をぽんと叩く。

「食べてみなさい」

何だか身体が熱が出たときのように火照っているのを感じながらアサリを食べるのだが、やはり苦く、今にも砂のじゃりとした食感があるのではないかと怯えた。

「変わらない」

「うーん、まだ効果が発動されていないみたいね。ま、そのうちかかるわよ」

その言葉を信じ食べ続けた結果、いつの間にかわたしはアサリを食べれるようになっていた。母は魔法使いだと思った。今でもそう信じている。

帰宅して、ぼーっとテレビを見ていると、安藤さんと兄が帰ってきた。

「深雪一、ただいま！ 今日はずき焼きだよ。好きだろ？」

「あ、そう」

兄は両手の大きく膨らんだスーパーの袋を持ったままで大きく身体をのけぞらせ「おい、反応薄いなあ。もっとテンション上げていこうよ」

「わーい」

またしても何やら騒ぎ始める兄を無視し、わたしは漫然とテレビを眺める。しかし脳内ではあの映像が繰り返し再生されていた。

「深雪、どうかしたか」

安藤さんが声をかけてくれる。最近急に老けてきたような気がする。普段はそこまで感じることはないのだが、声をかけて振り向いたふとした瞬間など、目尻の皺が増えたな、とか、やけに疲れた表情をしているな、と思うことが多くなった。

「ううん、なんでもない」

もちろん今でも安藤さんは頼りになる人であることは変わらない。わたしと兄のために人生を



投げうって不格好な愛情を注いでくれた。

——これからは俺のことを安藤さんと呼べ。お父さんは遠いところに行っちゃうからな——

——安藤さんがおとうさんのかわりになるの？——

——俺は安藤さんで、それ以上でも以下でもない。お父さんにはなれないよ。でもお前らは必ず俺が守る——

「そっか。ならいいんだが」

気まずい雰囲気になってきたので、わたしは自分の部屋に行くことにした。兄が、待ってくれよ俺の超絶料理テクニクを見てくれよすごいよ、という声を背中受けて階段を上がる。途中でふと思いつき足を止め、兄を見る。

「佐藤さんどうなるの」

「とにかく話し合いを重ねるしかないだろうな。カウンセリングってわけじゃないけど、なぜ暴力をふるってしまうのか。暴力をふるうことは悪いことで、相手がどんな気持ちになるのか。当然のことだけど、気づいてもらうために俺たちは頑張らなくちゃいけない」

「そっか」

先ほどの保奈美ちゃんの恐怖で歪んだ顔を思い出した。平穏な生活が訪れることを心から願う。

扉を閉め、ふーっと息をつく。なぜ自分の家なのにこんな窮屈になっているのだろう。思えばわたしたちはあの事件をきっかけに出会いここまで生活を共にしているのだが、大事な何かへ布をかぶせて時間を無駄に消費しているのではないかと疑いたくなる。

「そんなに悩む必要はないんじゃないか。深雪」

「へ？」

「へ、じゃねえよ。せっかく俺様が励ましてやろうとしているのによ」

ぽんぽん跳ねていくような陽気な声。わたしは部屋を見渡す。もちろん誰か人間がいるわけではない。兄や安藤さんの声でもない。しかもわたしの名前を知っているとはどういうことだ。

「どこ見てるんだよ。こっちだよ、こっち」

わたしはまさかの状況にあたふたするしかない。目を見開いて周囲を注意深く観察すると、どうやらぬいぐるみから声がしているようだった。

「やっと分かったか。まあ、でもびっくりさせちゃったな。俺の名前はジャックだ。もちろん知ってるだろ？」

『鍵屋のジャックと人形姫』という絵本の主人公のぬいぐるみだった。舞台となる国では人間や動物など関係なく言葉を発し生活している。あるとき王女が謎の病にかかってしまう。胸にできた光輝く大きな鍵穴にあう鍵をネズミのジャックを見つけ出し、病から救うという内容だ。

「お前おもしろい顔してるな。特に最初俺が声をかけたときは目ん玉が飛びでそうなくらい慌ててて傑作だったよ」

その声は日常の`音、が耳に入ってくるものとは違って、水の中で話すように、少しくぐもっていた。頭の中で声が響いている感じだ。

「は？」

訳が分からなすぎて頭がぼうっとする。

「は」何かのおもちゃになったかのように同じ言葉を繰り返すことしかできない。頭の片隅では馬鹿らしいと誰かが笑っているのは承知でぬいぐるみに話しかけてみる。「あの、本当にあなたが喋ってるの？」

「ああそうだよ。他に誰がいる？ あー、ずっと同じ体勢でいたから、身体が固いよ」

ぬいぐるみージャックは驚いたことに動き出した。勢いよくブリッジをする格好になったかと思うと、その反動を利用して、身体を前方に曲げながら両足で立つ。

青いつなぎの作業服にトレードマークである長い尻尾の先は、身体の半分はあろうかという大きな金色に輝く鍵を持ってぴんと天井へと向いている。毎晩母に読んでもらっていたジャックの勇姿を思い出した。あの絵本は何年か前に探したのだが、忽然とその姿を消していた。

「おいおい何だよ黙っちゃって。もしかして俺に惚れてるのか？」

顔の半分はあろうかという瞳を輝かせ、わたしを真っすぐに見つめてくる。

「何これ」

腕を組んで胸を張ってかっこつけるジャックに頭を抱える。

「何で急に喋りだしたの」

「あんたのお母さんの魔法さ。困ったときは助けるって約束してたんだよ」

ちょっとした小皿ほどの大きさの耳をピンと立て、彼は胸を張った。

「……そう」

あまりにも話が現実離れしていて、さらに頭痛がひどくなる。しかしあの記憶とも脳内の放送事故ともつかない映像を見た直後にこんなことが起こるのはただの偶然なのだろうか。

「深雪が一人でも生きていけると思ったら、俺様はいつでも消えるよ。それまで、よろしくな」

尖った歯を見せ、にかっ、と笑いジャックが高らかに宣言する。

「深雪ー！ ご飯ができたぞお。早く降りてきなさいー」

わたしは兄が部屋に入ってくるまでしばし茫然とその場に座り込んで、ジャックを見つめていた。

## 便利屋かをる

---

雨粒が断続的に何かに打ちつけ、作り出された不格好な旋律が耳に心地よかった。

小学校の低学年の頃に、雨が降り出したときにする匂いについて先生に質問したことがある。詳しくは記憶が曖昧だが、確か植物の何かの成分が雨の湿度に影響を受け発するものだそうだ。

わたしはなぜか植物が水分を吸って成長する際に発する匂いだと勝手に思い込んでいてひどく落ち込んだ覚えがある。

「まったく、最近雨が多くないか？ 何か憂鬱になるんだよな。鍵も錆びちゃうし」

せっかくいい気分で朝の緩んだ雰囲気を楽しもうとしているのにぶち壊しである。

「ポジティブって言葉知らない？ 文句ばかり言っていると口を糸で縫うわよ」

「ああやってみろよ。家の中の物めっちゃめっちゃに壊してやるよ。そうなったら誰が犯人になるんだろうな？」

しばしの間見つめ合うわたしとジャック。先に折れたのはこちらのほうだった。はあー、とこれ見よがしに長いため息を吐き出す。

「深雪ちゃん、まあ仲良くやろうや。俺と深雪は離れられない運命なんだ」

「何よ気持ち悪い」

隙を見て飛びかかるがひょいとかわされた。俊敏な奴だ。

いきなり喋りだしたぬいぐるみとの共同生活が始まって一週間たとうとしていた。もちろん安藤さんと兄にはこの事実は伝えていない。そうしたところでジャックいわく、この魔法は深雪にかけているので他の人間には話したり、動いたりすることを認識することはできない、と。つまりわたしが騒いだところで、発狂したのではないかと疑われるだけということだ。

「ところで深雪は学校には行かないのか。家にいるだけじゃないか。ニートか？」

「わたしはちゃんと働いてるの。てか何でニートなんて言葉知ってるの」

安藤さんはわたしと兄と住んでいるこの家を事務所として「便利屋かをる」という名前で個人から企業まで様々な依頼を請け負っており、わたしはいわばそこの社員というわけだ。高校を卒業してから本格的に手伝い始めた。スタッフは安藤さんとわたし以外に純という男がいるのだが、まあ、こいつはただの女たらしだ。

そんなことをジャックに簡単に説明する。

「そうだったのか。でも相当暇なんだな」

何も反論できない。そう、営業活動にも力を入れておらず、なかなか依頼がこず閑古鳥が鳴いているのが現状だ。収支のことは全く分からないが、兄の収入に少なからず助けられているのかもしれない。

仕事がない日は、安藤さんとリビングで何か話すでもなく過ごしたり、自分の部屋でだらだらとする。今日は安藤さんは朝から外出している。いつもの場所に行っているのだろう。毎月日には決まっていないが、必ず一日行き先も告げずどこかへと出かけているのに気づいたわたしは以前に安藤さんを尾行したことがある。

行き先は水族館だった。カップルに人気でそうな場所ではなく、遊園地に行くという約束を仕

事の疲れのせいにして、せめてもの機嫌取りに親子が訪れるような、その街にとけ込んだ施設のように感じた。

水族館の中には入っていない。入れなかったのだ。尾行しているときに何度か見えた安藤さんの表情は感情を押し殺してどうにか平静を保っているように見えた。まるで水族館へ向かうという行為が大切な儀式であるかのように彼の周囲は厳粛な空気が漂っていた。

わたしは安藤さんの内面の一部を知ってしまいそうで怖くなって、水族館の前で足が止まってしまった。わたし達家族は外見は何もなさそうに見えてどこか不足している。血がつながっている父や母がいないというそんな上辺のことではなくて、例えば家族というものをロボットで表すことができるのならばきっとネジを一つしめ忘れている。困ったことはそれがなくても動けることだ。

ちなみに、かをる、という名前の由来は安藤さんが以前に好きだった女優さんだと聞いている。

「なあ深雪」

「何よ」

「何か困っていることあるだろ」

「ないわよ」

「いやあるなー。俺はすぐ分かるんだよ。表情筋の動きを見ていればすぐに見抜ける」

「な、い」

「へっ、いいよ。後で俺様には逆らえないことが分かるからな」

勝ち誇ったような表情でこちらを見る。といっても背の高さはわたしの膝までもないので様になっていない。

「いつまでも減らず口叩いてなさい」

兄にはあのフラッシュバックのことはまだ打ち明けていない。もしかしたらそれこそが足りないネジかもしれないのに、何かが壊れそうな気がして行動に移せないでいた。

ふと時計を見て慌てる。もうこんな時間か。そろそろ兄が帰ってくる。今日はわたしが料理当番なので支度をしないとイケない。

兄が泣いていた。

「深雪、何だこれは。砂漠で一週間水だけで生き延びて、その後初めて食べた物のように食への、生への感動を俺は今猛烈に感じている」

「ただのレトルトの親子丼なんだけど」

「……作る人によってこうも味が違うとは」

「いやいや変わらないでしょ」

わたしが料理を作るときはいつもこのような具合である。兄にとってわたしの料理は味がどうのこうのという話しでなく、「深雪が作ってくれた料理」というエッセンスが加えられ、どんなにお粗末なものでも涙を流すほど感じ入るのである。正直、毎回これだと単純にうるさいだけで迷惑だ。

安藤さんはまだ帰ってきていない。出かけても夕飯頃にはいつも帰ってくるのにどうしたのだろう。

兄はまだ一口食べるたびに、雪原に咲いた一輪の花のようだとか、樹齢千年の大木の葉から舞い降りた一雫だとか、料理の感想を述べるには不適當な言葉を用いて、何やら噛みしめるようにつぶやいている。

ジャックは近くの棚の上にいる。食事をしようと席についたときにはそこにいたのだ。

「深雪の兄ちゃんやばいな。頭大丈夫か」

わたしは隙を見て、静かにしろという意思をジェスチャーで示す。

がたん、と玄関のほうから音がした。兄もわたしも一瞬お互いの顔を見て、すぐに席を立つ。安藤さんだった。傘立てが倒れている。玄関に座り込んだまま起き上がろうとしない。

「飲み過ぎてしまった」

確かに酒の匂いが鼻をつく。

「何やってんだよ。情けない」

兄がすぐに安藤さんの片手を自身の背中に回し、体勢を起こす。

「うるせえ。お前は全然酒飲めねえじゃねえか」

「はいはい、すみませんね。ほら、階段上がるよ足上げて」

本当に今日はどうしたのだろう。こんな姿を見るのは初めてだ。

「深雪、上に水持ってきて」

「うん」

コップに水を注ぎ二階へ上がると、安藤さんはすでに大きないびきをかいて寝ていた。

「全く。何やってんだか」

「まあ、たまにはこういうこともあるでしょ」

リビングに戻り、食事を再開する。自然と安藤さんの話題になる。三人で暮らし始めたのはまだ兄が小学生でわたしは幼稚園生のときだ。

安藤さんなりにわたしたちと打ち解けようと必死だったのだろうが、何をしたい、何を食べたい、とことあるごとに疑問を投げかけられ困ったものだ。

「最後には、楽しいか、おもしろかったかとか言ってきてさ。聞くものじゃないだろうって、頭の中でつつこんでたよ」

「そうそう。必死感がすごかったよね」

ただ安藤さんはいつも側にいてくれる。特に会話がなく、同じ空間にいてもなぜか苦にならない。根拠はないが、テレビを見ていても、新聞を読んでいても、爪を切っている、恐らくわたしが助けを求めたらすぐそれに応じてくれると確信している。

「安藤さんってさ、どことなく熊に似てない？」

兄に言われ、じわじわとニヤけてくる。

「あー、確かにそうかも」

そうか、あの安心感と頼もしを感じるのは無意識に熊を連想していて、そこから考えが喚起されているのかもしれない。

ふと思いつき、兄に trying みる。

「そういえばこの前変な夢見てさ」

「うん。どんな？」

真剣な表情にならぬよう注意しながら、あくまでも笑い話なのだと、笑みを浮かべる。

「安藤さんが血だらけの包丁を持ちながら、立ってるの」兄は表情を硬直させたまま動かない。なぜだ。何だそりゃと笑ってくれ。「訳分かんないよね。しかも安藤さんがいる場所は前に住んでいた家なの」

一瞬の間のと兄がふきだした。口を手で押さえ肩を震わせている。やがてそれをやめ、大声で笑い始めた。テーブルを叩いてもいる。ひとしきり時間がたち満足したのか目元をふきながら席を立った。

「あー、笑った。深雪ちょっと心が病んでいるんじゃないか？ 休養も大事だぞ」

席を立ち、食器を台所へ運び、洗い始める。我が家では食器は自分の物は自分で洗うしきたりになっている。

わたしの頭の中は混乱と、自身の予想が当たったことでどんな事実が存在するのかを思考する冷静な気持ちがないまぜとなって吐き気すら感じていた。

楽しみにしていた森野屋のプリンを勝手に食べたとき、わたしを心配させまいと目が真っ赤に腫らしているのに、安藤さんとけんかしてないと言い張ったとき。

何年付き合ってきたと思っている。嘘をついているかどうかぐらい、毎回同じ態度だから分かる。もっとうまくやりやがれ、へたくそ。

「えらい夜中から出発すんだな。あーあ、リカちゃんと会おうとしてたのに」

「あんた本当に典型的なチャラ男ね」

ワックスで無造作に立たせた純の金髪頭を軽く小突く。似合っているのが余計に腹が立つ要因だ。

「おい、訳わかんねえ色に髪染めて、指に刺さるようなツンツン頭のガングロとは一緒にすんな」

仕事現場へ向かう車中である。急な依頼ということで、準備もそこそこに自宅を飛び出した。安藤さんとわたし、純も途中で拾って、いつもの三人編成である。ジャックは置いてきた。逆らえないとか何とか言っていたが関係ない。突然わたしが肌身離せずぬいぐるみと行動を共にし始めたら、明らかに頭が狂ったと判断される。

安藤さんからは、いつものことだが、人助けだ、としか訊いていない。昨日のこともあり、何となく訊きづらい状況ではある。

「安藤さーん、今日は何しに行くの」

渡りに船、馬鹿と何とかは使いよう、である。軽薄でべらべらと無駄なことばかり喋る純を安藤さんは意外にも嫌っていない。気に入っているとまではいかないが、良好な関係を築いていると言える。

「人助けだ。さっき言っただろ」

「ちえっ、教えてくれたっていいじゃん」

静寂が落ちる。他人がこの場にいると居心地悪いだろうが、わたし達にとってはいつものことである。きっと今安藤さんは、どうしよう内容言っちゃおうかな、とでも考えているだろう。信号が赤になり止まる。

「赤ちゃんポストって知ってるか」

わたしは内心でほくそ笑む。

「うーん、知らないっす」

「深雪は」

「……前にニュースでちょっと。施設にただ置き去りにするなら、赤ちゃんの安全を確保できる場所に預けてほしいってことで、設置されたものでしょ」

「そうだ。だいたい合ってる。今回の依頼内容はそのポストに赤ちゃんが置き去りにされないように阻止する、という仕事だ」

「え」

わたしと純の声が重なる。純を軽く睨んでわたしは反論する。

「それ、大丈夫なの？」

「大丈夫だ。問題ない」

「安藤さんいつもそれじゃん」

「おいおい、それが便利屋かをるのリーダーへの口の聞き方かよ」

「純、黙ってくれ。うるさい。それに俺はリーダーでも何でも無い。安藤さんだ。それ以上でも以下でもない。とにかく大丈夫だ」

「せっかくフォローしたのに」

純の涙混じりの声が車内にむなしく響く。

依頼を引き受けるかどうかは安藤さんの独断で決める。まあわたし達からは口を出す筋合いは無いと思うのだが、先日の佐藤さんの件もある。どうしようもない場合は警察を呼ぶということも選択肢の一つとして考えておかななくてはなるまい。

「もうすぐ到着する」

現場でおろす荷物を準備しようと仕事のとくにいつも使っているボストンバッグに手を伸ばすとジャックの顔が少し覗いていた。

「ひゃっ」

「どうした？」

悲鳴に驚いて純が後部座席を振り向く。

「な、何でも無い」

ジャックは鞆からゆっくりと這い出し、「だから俺様とは離れられないと言っただろ」と得意満面の表情でのたまった。

「あらあら遅かったのね。もしかしたら来ないのかと思ってドキドキしていたわ。でもそんな訳ないわね。あなた方の評判は聞いているのよ。迅速に、そして的確に依頼したことを実行してくれるってね。夫はそれができなかった。そう、邦明は仕事ができなかった。そんな私達に訪れる結果なんて分かりきってるわよね。離婚裁判は泥沼——」

「八橋(やつはし)さん、その話も非常に興味があるのですが、本題に入りましょう」

「あら。ごめんなさい。いっつも気づいたらこの話しになっているのよ。もう五年も昔の話になるのにね。もしかしたら邦明への想いがまだ断ち切れていないというシグナルを身体が教えてるんじゃない——、あ。安藤さん、ごめんなさいね。そんな真っすぐな、冷たい視線はやめて。もう本当に私ったら。はいお待たせしました。本来皆さんに集まってもらった趣旨をご説明しましょう。じゃあ、あなた赤ちゃんポストというものはご存知かしら。そもそも`赤ちゃんポスト、`っていう安易な名前でも呼びたくないんだけど」

純が指名される。

「あの、さっき車の中で赤ちゃんポストのこととか、今回の依頼内容は聞いたんで大丈夫です」

「……まあまあ。だめよ。だめ！ あなた。まだ若いんだし、イケメンだし。大人の言うことにはちゃんと従ったほうがいいわよ」

「いや、別にいいっす」

まあああ、とまた八橋さんがマシンガントークを炸裂しそうになるところを安藤さんがなだめる。

「すみません。こいつ綺麗な人の前ではぶっきらぼうな態度になるんですよ」

安藤さんが目で、俺の言うことに合わせろ、と指示を送る。



「あのおばさん息継ぎいつやってるんだろうな」

ジャックの音がする。鞆を叩き、黙らせた。

安藤さんの説得が何とか成功し、わたし達は赤ちゃんポストの監視を静かに始めた。すでに車では入ることのできない時間になっていたが、病院を囲んでいるフェンスの一人一人が通れるほどの穴があいており、そこから敷地内に入った。八橋さんが自慢げに、一週間もかかったのよ、と言ったのは気にしないことにした。

「赤ちゃんポストの設置が日本で始まって五年目になる。今まで合計で七〇人以上が置き去りにされたわ。こんなに多くの赤ん坊が捨てられてるのにみんな黙っているなんておかしいと思わない？ 病院は子供が預けられると国から支給してもらえる措置費をもらうためにこんなことやってるのよ」

八橋さんが力説をするのだが、なぜだか頭に入ってこない。

それとなく外見を観察する。歳の頃は四十歳近いだろうか。ピンク色のポロシャツに動きやすいようなパンツ、という服装だった。

おあつらえ向きの茂みがあり、そこで四人身を潜めて待つ。病院の裏口だった。薄ぼんやりとした明かりが辺りをほのかに照らしていた。

小さな扉にはかろうじて「天使のゆりかご」と確認できる。レバーハンドルが付いており、恐らくそこを開くと赤ちゃんを預けることのできる空間があるのだろう。

いつ来るのかはもちろん分からない。今日来ない可能性もある。

前は安藤さんが初めて依頼人に牙を剥いて驚いたが、普段は純が依頼人に態度や、言動におかしな点を感じ取ると、すぐ反抗する。

八橋さんのキャラにうんざりしたのか、先ほどから浮かない表情だ。

「テンション上がらなくても、そのときがきたらちゃんと働いてよね」

「うるせえ」

それきり黙ってしまう。やはりおかしい。

「二人とも静かにしろ。……純、大丈夫か」

安藤さんも気になったのか暗がりですっかりと純の顔を見つめ、問いかける。

「だから大丈夫だって言ってるじゃないですか」

それきり誰も言葉を発することなく、時間が過ぎていく。たまに八橋さんが、大丈夫、大丈夫、と自身に言い聞かせるようにつぶやく程度だ。

ずっと同じ姿勢をしているため衣服が肌に貼りついて気持ち悪かった。顔の汗が、何度拭っても噴き出してくる。

「なあ、何で自分の子供を捨てるんだ？ 俺の国ではそんなことする奴一人もいねえぞ。大切な働き手だからな」

「いろんな事情があるの。そもそもあんたはネズミでしょ」

「ネズミも人間も変わらねえよ。ソモソモどうせ捨てるなら子供作らなきゃいいデシヨ」

わたしの真似をしてるのか、ところどころ裏声で返事をする。

どう応えていいのか喉で言葉が詰まる。うまく説明できそうになかった。それにジャックのあ

まりにもストレートな言葉は一つの真実であり、胸にストンと落ちた。

「深雪、何をぶつぶつー」

「来た来た来たっ」

安藤さんがわたしに注意しようとしたところで、八橋さんが鋭く叫んだ。

鞆から小型の双眼鏡を取り出す。赤いプリントTシャツにグレーのスウェットパンツというウォーキングにでも行きそうな服装である。胸にはまだまだ母乳を必要としていそうなあどけない顔が覗いている。周囲を気にする様子もなく、赤ちゃんポストのほうへと進み、ドアノブに手をかけたところで、八橋さんが飛び出した。

「あなた、待ちなさい」

八橋さんがダッシュで飛び出した。わたし達も後を続ける。女性は一瞬身体をびくっと震わせ、呆気にとられた表情でこちらを見ている。

まあ、当然だろう。

「あな……、あなたねえ考え直しなさい。絶対にだめ。お腹を痛めて産んだお子さんでしょ？ 今日本は少子化です。合計特殊出生率は一・三九です。過去に先進国で一・五を下回った国はそこから盛り返した前例は極めて少ないの。あなたはとてもいいことをしたのよ？ ほら、だから赤ちゃんがぐっすり寝ている間に家に帰りなさい」

近付いて薄明かりに照らされたその母親はまだ若かった。歳はわたしとそう変わらないだろうが、目のくまが異様に目立っていて、それが彼女を老けさせている原因となっていた。

「あの、突然すみません。わたし達は怪しい者ではありません」

こちらが気が動転しており、相手を怪しませるにはこれ以上ない言葉を口走ってしまった。すると女性はみるみる顔をゆがめ泣き出してしまった。

「あ、あの、ごめんなさい」

「泣くとこちらが許すと思って？ 考えが甘いわ。昔の偉い誰かが言ってたわ。`女にも武器あり、いわく涙これなり、ってね。まあでもここに来た考えをあらためるといふなら、これ以上私達はあなたに言うことはないわ」

そう言ってなぜかわたしを、いいことを言ったでしょ、と言わんばかりに誇らしげな表情で見てくる。

八橋さんは単に主観で塗り固められた正義を振りかざして、社会の役に立っているという自己満足を得ただけなのではないかと疑いながら、安藤さんと純にどうする？ とアイコンタクトを送っても、二人が動く様子はない。

安藤さんは事の成り行きを見守っている。純は女性に目を向けてはいるが、どこか遠くを見ているようだった。

ついに赤ん坊も泣き出してしまった。初めは控えめに、やがて涙腺の堤防は決壊し、大声で泣き始めた。泣き声はこちらの不安な気持ちをどんどん増幅させていく。

「ああ、起きちゃったのね。ごめんね。ほら、お母さん泣いちゃっておかしいよねえ。ほらこっちにおいで」

母親は我が子を抱きかかえ、八橋さんに背を向ける。

「ふん、そんなことするなら、ここに来なけりゃいいのに」

「八橋さん」

思わず声を上げるが、聞こえていないはずなのに無視される。

「いいじゃないですか」母親は素っ気なく、しかしわたし達に思いきり投げつけるように強い声で、言った。「カズヤはどこか行っちゃうし、それでもこの子を育てようと思って産んだけど、毎日嫌がらせみたいに泣くし、親にも言えないし、どうすればいいか分からないの。このまま生活を送ってもこの子のためにならない」

「わたしの兄はあなたみたいに困ってらっしゃる方のお話を聞いたりしています。兄を紹介させていただきます」

母親は力なく微笑む。

「ありがとう。でもね、もうこの子の顔も見たくないの。また家に戻ってあの生活に戻るのは絶対に嫌。育児を放棄してこの子が死んじゃったりしたら、あなた責任取れる？」

「あなたねえー」

八橋さんの髪の毛が逆立った、ように見えた。

「選択するのはあんただ。そこの扉を開けるか、それともその子と一緒に家に帰るか。ただな、これだけは言える。どんなにつらいことがあっても子供の笑顔さえあれば一瞬で吹き飛ぶ。そんなもんだ」

母親に覆いかぶさらんばかりに前に出ようとする八橋さんを手で制し、安藤さんが口を開いた。

「……そんなの知ってる。でも今は笑顔を見ても何とも思わない」

「そうか。ならしょうがない」

安藤さんは淡々と返事をした。話しは終わりだと合図するかのよう腕組みしてからは口を開くことはなかった。

八橋さんが赤ちゃんポストの前に立ち、両手を広げて通せんぼをする。

「だめ。考え直しなさい。何なら私が色々と相談に乗るわ。いいの？ あなたこれ以上後悔できないってくらい後悔するわよ。喪失感で食事も喉を通らなくなって、体重が減って、体調壊して――」

突然純が動いたかと思うと母親の腕をとった。

「置き去りにしないでください」

「ちょっと手を放してよ」

「この子がどんなに苦しむと思うんですか。何で捨てられたんだろう、自分のどこが嫌いになったんだろうとか、答えの出ない自問自答繰り返して毎日を過ごすんですよ」

「放してって」

「つらいのはあなただけじゃないんです」

純がこんなに必死になっている姿を初めだ。わたしは大好きな俳優がコンビニで買い物をしているところに出くわしたようなバツの悪さを感じていた。

彼にこんな姿は似合わない。わたしは一人間としては最低の評価を下しているが、容姿につい

てはいわゆるイケメンの部類に入ることを渋々認める。

別々の方向へ緩やかにねじれている柔らかそうな髪を指でもてあそび、三白眼に対する抵抗は鼻筋の通った端正な顔をくしゃくしゃにする笑顔ですぐに吹き飛んだ。突発した状況に動揺したのかそんなことをふと考えてしまい、頭を軽く振り正気に戻す。

「ちょっと純」

「何で、何でそんなことできるんだ」

激昂した純が母親につかみかかったところでとっさに近くにいた八橋さんが間に入る。しかしすぐに弾かれるように後ずさりをしてよろよろと地面に倒れた。その拍子に黒い紐を通された板が首もとから出てきた。アクセサリーには無骨な代物だったが、気にしている場合でもない。純に目を戻すと安藤さんが後ろからはがいじめにしていた。うなだれてじっとしている。自分が何をしていたか理解したようだった。

すみません、という純の胸から何とか絞りだしたようなかすかな声はわたし達のただ中にぼとりと落ちた。

「――でさ、そのとき安藤さん、わたしはアイスって言ったのになぜかホットドッグを買ってきたよね」

「俺には確かにホットドッグって聞こえたんだよ。あのパンにソーセージが挟まれててケチャップがかけられているイメージも完璧に浮かんでいた」

「何でそうなるかなあ」

「でもおいしそうに食ってたじゃないか。結果オーライだ」

「あれは安藤さんが間違えたって落ち込んでたから、演技をしてただけだよ」

「おい」

「嘘よ、嘘。ほら、ちゃんと前向いて」

乾いた笑い声を上げる。ずっと昔の、遊園地へ行ったときの話だ。仕事が終わった後の車内でこんなに話すことはない。安藤さんも付き合ってくれている。

純の言葉が届いたのか、結局あの母親は子供を連れて帰ることにした。再びあの場所に戻ってくる可能性もあるが、別れ際に言った、もう一度この子と生きてみる、という言葉信じることができない。

わたしはといえば、逃げたかった。可能なら普段は軽薄でへらへら笑っている純の今まで見たことないような表情や、我を忘れた焦った行動などなかったことにしたかった。理由は分からない。ただ先ほどの言動について深く知ると今までの純との関係が壊れてしまうような、漠然とした不安だけは感じていた。

「安藤さん、何で八橋さんは今回の依頼をしてきたのかな」

低くて起伏のない口調からは少しの感情も読み取れない。フロントミラー越しにちらと見ると、純は手を組んでうつむいてた。

車を止め、信号が青に変わるまでたっぷりと間を置いて安藤さんは応えた。

「八橋さんは赤ん坊が欲しかったんだろうな」

「そう言われてみたらそうかもしれないけど、実際はどうかは分からないよ」

答えになっていないがとりあえず、反応する。

「首に木の板を下げてたろ。あれは安産祈願だ」

「……そうなんだ」

変人としてしか見れなかった八橋さんの印象が塗り替えられるが、どうしても共感はできなかった。あの行動はやはり屈折している。ただ離婚した今も安産祈願を首に下げ、生活している姿を想像すると心がどんどん空っぽになっていくようにむなしい気持ちになった。

「俺たちが抵抗を感じるのとは比べ物にならないくらい、`赤ちゃんポスト`を理解できなかったんだろうな」

対向車線を走る車のライトに安藤さんの顔が照らされる。淡々とした表情だが、心なしか少し色を失ったように見えた。

「なーんか、色々考えすぎてお腹空いちゃった」

ふん、と鼻で笑う声がして、わたしはフロントミラーを睨んだ。

「何よ」

「もういいよ深雪」

「だから何がよ」

「気遣わなくていいって。俺がさっきあんなことしたから驚いてるんだろ。もう言うよ。別に隠してたわけじゃないけど。俺、捨て子なんだ。施設で育った。色々思い出してさ、抑えきれなくなった」

思わず息を呑んだ。呑んでしまっていた。そうなんだ、とかそんな冗談を色んな女に言っているでしょ、とも言えないわたしはひたすらフロントミラーを見つめ返すことしかできなかった。

「冗談じゃねえからな」

「そんなこと冗談でも言っちゃいけないわよ」

ちらりと安藤さんを見るが、慌てた様子はない。だんまりを決め込むようだ。

「女がただ好きな奴じゃなかったのね。純にそんな過去があらうとは」

「いいか？ おもしろいだけじゃモテないんだよ。軽妙なトークの中にはっとするような少し学のあるような話をすれば女なんてすぐに落ちる」

決して認めたくはないのだが、実際純はモテるようだ。以前に便利屋の仕事で買出しにいったときに電車で女子高生から妙齢の女性まで、視線が純を捉えていることに気づいたのは一度や二度ではない。

「はいはい。もうあんたの恋愛講座には飽きたよ」

「聞いていたほうがいいぞ。さっきの話は女性にも言えることなんだ。どんどん実践していけば、なかなか日の目を見ないお前も――」

「殴るよ」

「怖っ」

純の長所は軽いノリで付き合うことができることだ。純自身もわたしが表面的な関係だけを求めていることを気づいているのだろう。彼と真面目な話をした記憶がない。

「純、ついたぞ」

安藤さんがわたし達の罵り合いには全く意に介さない様子で告げる。確かに恒例行事みたいなものだが。

「そんじゃ、お疲れ様で一す」

車を降り、何となく遠ざかっていく背中を見ていると、ジャックが声をかけてきた。

「おい、あいつ忘れ物してるぞ」

「え」

きっと女に貢いでもらったのだろう、中央に大きなロゴが入った手提げ鞆があった。

「安藤さん、純がバッグを忘れてるから届けてくる」

「分かった」

バッグを手に取り、車を出て、純の背中に声をかける。

「悪い」

「こんな分かりやすいもの忘れんなよ」

「そんなかりかりすんなって」

「それじゃ、また」

「あ、深雪」

なぜか恥ずかしそうで、少し怯えてもいるようにも見えた。

「さっきの話なんだけどさ、実は俺を産んだ人に会いたって言われてるんだけど、会ったほうがいいかな」

「産んだ人」という言葉が印象的に頭の中で再生した。

「急にそんなこと言われても、分かんないよ」

「……だよな。けどさ、俺がまだランドセルに身体がくっついているような小さな頃に俺と親父置いて勝手にどこかに行きやがって、今更会いたいとかないよな」

純はいつものくしゃっとした笑顔を見せた。やっぱり、かっこいい。

今まではマユミちゃんの胸がでかかったあの、ミカちゃんのあえぎ声がとてもよかったあの、そんな話しかしなかったのに、何でいきなり母親に会うべきかどうかの話をしているのだろう。

「変な話してすまん。またな。あ、てか今度合コンやるんだけど来る？」

「そんな破廉恥な会合にはいかない」

「破廉恥って。――おい」

純の言葉を無視して安藤さんのもとへ足を向ける。

「なあ深雪、あいつ車出る前バッグを見てから出てたぞ、何で忘れたなんて言うんだ」

ジャックの入ったトートバッグを思いきり叩く。

相変わらずポンポンと跳ねるような軽い声に手を振り応える。わたしは先ほどせっかく勇気を出して振り絞った相談を拒絶したことに罪悪感を覚えていた。

ふと目が覚めた。デジタル時計が午前二時を示し明滅している。帰宅し、シャワーを浴び、ベッドに腰かけて携帯をいじっていたところまでは覚えているのだが、いつの間にか眠ってしまっ

ていたらしい。

階下から低く、投げつけるような口調のやり取りが聞こえてくる。

どうしたものか。軽くため息をつき、部屋の隅のほうを見る。驚くべきことにジャックは毎日きちんと睡眠をとる。いびきもかく。床が固いということで座布団をマットレス代わりに、何だか落ち着かないということでバスタオルを布団代わりに使っている姿を見て、あらためて一体こいつは何者なのだろう、と独りごちる。

この前唐突に脳に像を結んだ、安藤さんが包丁を持った光景がよみがえる。好奇心のほうが勝った。音を立てぬようドアに近づき、そっと開ける。さすがに階段を降りてしまうとバレるので、ぎりぎりのところまで這って階下を伺う。あまり聞き取れないが、いつものように兄が安藤さんへ一方的に牙を向けているようだ。

「――になったら、深雪に話すって――か」

「分かってる」

「安藤さんには――感――てるよ。でも、言おう。――だ」

「……。この前水族館に行ったとき――って言われたよ」

そこで兄が沈黙した。どのような状況になっているか全く分からない。

「安藤さん、深雪に――説明しよう。もう隠せない」

安藤さんが短く吐き捨てるように何かを言った。何となくだが嘲りや皮肉めいた響きがあった。再び兄がしばらく黙り、懇願するような声音で言う。

「だからその話は――って。事故――安藤さんのせいじゃ――」

事故。

どうやら会話はそこで終わったようだ。終始断片的にしか聞こえず、すっきりしない。

カチャカチャと何かが触れ合う音がする。食器の片付けを始めたのだろう。わたしは洗面を下げながら部屋へと戻った。二人はわたしに何を隠しているのだろう。もちろんあの事件に関係していることなのだろうが、できれば考えたくないし、これ以上何かを知りたいとも思わない。

深く深く奥に押し込んで、忘れようと、必死で目をそらそうとしていたのに、扉がまた開こうとしている。見えない手に心臓を撫で回されているような気がして、自分で自分を抱くように身体を縮める。

盛大ないびきをかいているジャックが、んが、とうめいた。

兄と安藤さんの口論が引き金となったのか、夢を見た。

父がいる。なぜ母と一緒にいないのか、散歩なのか、目的地へ歩いているのか判然としない。ただ、日常にできた隙間を埋めるように、たまにそんな時間があつた。

歩いているうちに自然と顔がほころぶ。赤い屋根の家の壊れた三輪車、将棋盤の置かれた木製の長い腰かけ、こんにゃくを自宅で製造している家の、それを固めるために使っていた凝固剤の独特な匂いと、いつも濡れた石の床。記憶が音もなく押し寄せてくる。

その柴犬はいつもふてくされているようだった。一般的なイメージでいえば忠犬で、どこことなく笑顔で、そこはかたない安心感を感じさせるものだが、わたしはこの犬のおかげでいまだにそれになじめない。

学校をサボる不良学生よろしく、投げだした両足に頭を乗せている光景がお決まりだった。そのため名前はサボと勝手に名付けていた。

普段は通り過ぎていたのにその日は何を思ったのか父はおもむろに立ち止まり、ゆっくりと腰をかがめ、サボの頭をそっと撫でた。

サボは一瞬ちらりと父を見つめるも、すぐに興味を失ったのか頭を撫でさせながら、目をつぶる。

「はは。なんだか犬らしくない犬だなあ。おい、尻尾とか振れよ」

もちろんサボは無反応だ。わたしはといえば父とサボから十分な距離を置き、少し怯えながら静観していた。

「深雪もこっちにきな」

「……いやだ」

「怖くないよ。見てみろ、世の中のことなんてどうでもいいような顔をしてる。お前のことを襲ったりしないよ」

襲ったり、の部分でびくっと身体が反応する。わたしはどうにも不安を拭うことができず、立ちすくむ。するとサボが目を開き、眼球だけをぎろりと動かし、こちらに視線を飛ばした。サボの声が聞こえたような気がした。「お前、俺が怖いのか」と。

馬鹿にされたような、挑発されたような何か癢に触る気持ちになったので、わたしは恐る恐るではあるが、サボに向かって歩を進める。

その間もサボはわたしをずっと見つめている。ここら辺だろうという場所で腰をかがめ、手を伸ばすもあと少し届かない。姿勢はそのままであらためて撫でようと手を出した瞬間にサボが突然頭を上げたかと思うと、口を大きく開けて手に噛みつこうとする。身の危険よりも、そんな素早い動きができるのか、やはり犬なんだな、という間抜けな感想が浮かんでいた。

サボは見事獲物をしとめた。四本の足ですっくと立ち、顔を小刻みに左右に振り、グウウ、と唸ってもいる。しかしそれは父の手だった。

「いってえなあ。ったく、お前人の娘に手出してんじゃねえよ」言葉とは反対に父は笑っていた。もう片方の手でぽんぽんと手で頭を叩く。「深雪。こいつは怖いからこんなことしたんだ。お



前にびびったってことだぞ。よーし大丈夫だ、大丈夫」

血をだらだらと垂らしている父は決して大丈夫ではないのではないかと心配しながらも、嘔み付くのをやめ、再び何もなかったかのように伏せの状態でもぶたを閉じる。

父はしょうがない奴だな、という表情で軽く肩をすくめてみせる。今度は父が目だけで話しかけてきた。撫でてみるか？ と。

こんな凶暴な奴の頭なんか撫でたくないとすぐに思ったが、父が身体を張ってくれたチャンスを逃せないとも思った。何より父の表情は先ほどかまれたことを微塵も感じさせないほど穏やかで、いつの間にか心は決まっていた。

わたしは泣きそうになりながら手を伸ばす。いつまでも届かないような錯覚を覚えたが、やがてちょっとだけチクチクするけど、温かく柔らかい感触が手から伝わってきた。

「気持ちいいだろ」

わたしはこくんとうなずく。

たいしたことをしているわけではないのに、なぜか興奮していて達成感がじんわりと胸に広がっていく。

それからわたしと父はサボが大きなあくびをするまで頭を撫で続けた。

## 告白

---

目の前の女の子は虚無をも感じさせるような無表情で、所々塗装がはげている使いこまれた携帯をいじっていた。これでもかたくさん付けられたストラップの熊やうさぎのぬいぐるみ達がそれぞれとびっきりの笑顔で身体を揺らしている。

「マユミちゃん……？」

さっきから何度も無視されているのに、めげずに純がおずおずと声をかける。「マユミちゃん」は微動だにしない。

わたしは目の前の女の子から顔を背けて本日何度目かのため息をつく。恨めしい思いを噛みしめながら、先日の電話のやり取りが頭にぼんやりと再生される。

〈やあ深雪ちゃん。突然だけど、彼女になってくれないか〉

普段わたしを呼び捨てにしている純がちゃん付けで呼ぶときは要注意だった。

〈は？〉

〈失礼。彼女のフリをしてくれないか〉

〈嫌よ。どうせまた何かやらかしたんでしょ。自分で何とかしなさいよ〉

〈マユミちゃんが何で付き合えないのってきかないんだよ。だいたいあのとき勢いでやらないほうがよかったんだよ。ったく胸だけはでかい――〉

〈切るよ〉

〈待て待て。やめたほうがいいと思うなー〉

なぜか純は余裕があった。

〈何よ〉

〈断ると、深雪ちゃんの顔写真、メルアド、電話番号とかマユミちゃんに教えようかな〉

あまりの卑劣さに言葉が詰まる。

〈マユミちゃんすぐ思いつめちゃう性格だからなあ。もしかしたら、めちゃくちゃ連絡してくるかも〉

〈あんたねえ……。今から法を犯すって言ってるようなものよ。卑怯者〉

〈やることは簡単さ。俺の言うことに合わせてればいいから〉

ご存知の通りわたしは結果として頼みを引き受ける覚悟を決めた。

女性関係でお願いされるのは初めてで、どんな面をした女の子と付き合っているのか興味があったし、何より先日の赤ちゃんポストでの一件が喉に引っかかった骨のように違和感が残っていたからだ。

しかしここまで面倒くさいとは想定していなかった。

マユミちゃんはようやく顔を上げたのだが、眉間に皺を寄せ何やら考えている。純と視線を合わせようとはしない。

「ジュンジュンをどこまで知っているんですか。私はすごくジュンジュンを愛しているから、全部知っています」

やっと口をきいてもらったと思ったら、そんな質問が出てきた。テーブルに身を乗り出し、真

っすぐにわたしを見つめてくる。ついでに胸もテーブルに乗っている。

「じゅ、ジュンジュン？」

変な愛称で呼ばせてるんじゃないねえよという怒りを込めて、純を軽く睨む。

「そうね……、えっとその人をどれだけ愛しているかって、どれだけその人を知っているかだけじゃないと思うの」

しどろもどろで何とか応える。

「じゃあ、何だって言うんですか」

「それは……」

そのときわたしの眼前には、わずかだが密度の濃い母との記憶が身体を通り抜けた風のように幸せな残像を残し、去っていった。

あまりにも現実離れした別れ方をしたから、実際よりも美化されて脳に刻まれているかもしれない。ただ母のことを思い浮かべると寄せては返す波の音のように心の雑音は取り除かれ、わたしの身体は澄んでいくのだ。

「……その人といるとどんなに安らいで落ち着いていられるか、じゃないかな」

マユミちゃんは一瞬怯むが、再び噛みついてくる。

「じゃあじゃあジュンジュンは深雪さんといるときは、そういう気持ちになってるってこと？」

「ええそうよ。ね、ジュンちゃん」

マユミちゃんの顔が一層険しくなる。もちろんジュンちゃんと呼ぶのは初めてで、鳥肌が立ってしまった。純も思わず表情を強ばらせるが、何とか耐えて、応える。

「ああ、俺は深雪の身体にぬいぐるみになったようにすっぽりと収まるとすぐ寝ちゃうんだ」

「そうそう」

いよいよ、むき——！ という声が聞こえそうなほどマユミちゃんは歯を食いしばり、穴のあくほどわたしを睨んでいる。ここでとどめを刺すしかない。

「ほらジュンちゃん、いつもの」

「うん、ミュミュ」

意を決しわたしが純を胸に抱いたところでマユミちゃんはずいに沸点に達したのか、水をわたし達にぶちまけ、店を出ていった。

マユミちゃんが去ったあと、互いに今回の一件について罵り合い、喫茶店を出た。この暑さだったらすぐ乾くかもしれないと考えられる自分はまだ冷静だと自覚する。

「何でこんな目にあわないといけないのよ。これから何あってもわたしは助けないから」

「いやー、深雪ちゃんは本当優しいな。人間ができているんだらうなあ」

棒読みで純がほざく。

「今から水買ってくるから、もう一度かけてやろうか」

「それはやめてください」

それから二、三文句をたれたが、ふいにお互い無言になる。わたしはこの種の沈黙が嫌いなので急いで話題を探すが出てこない。

「この前お母さんと会うかもしれないって話どうしたの」

なぜかそんな言葉が口をついて出た。

「どうすればいいんだろうな。どんな顔をしていいか分からないし」

純にいつもの軽薄な表情はなかった。肩を落とし力なく言葉を吐く。

「そっか」

駅までの道のりは短いが多く、思うように進まない。差し出されるティッシュを何度か断った。交差点の信号が赤になり、足を止める。

「会いなよ」

入り乱れる雑多な声にかき消されたのか、純が均整のとれた顔を近づけてくる。

「え？」

「お母さんに、会え、って言ったの」

大きく口を開いて一語一語区切って声を張り上げる。純はびくっと身体を震わせ顔をしかめていたが、やがて微かな笑みを浮かべた。しかしそれはわたしが期待した種類の笑みではなかった。

「ありがとう。でも会わないほうがいいのかもな。今更連絡してきて、母親面されるとか意味分からないし」

わたしは純にいつも女の子の話をしているようなだらしなくて、何でも適当にこなしてしまうように薄っぺらい人間でいてほしい。そんな純がわたしは好きなのだ。

だからわたしは純にあのこを告げることにした。思えばわたしが人に心を開けなくなったのはこれが原因なのだろう。気づいていたのに蓋をしていただけだ。あ那时的わたしは馬鹿正直に、この人は、と判断した人に打ち明けては、傷ついていた。いつか受け入れてくれる人間がいることを心から願いながら。

「純、冗談と思わないで真面目に聞いて」大きく息を吸う。身体中がカチコチになり、周囲から音が消える。「わたしの家さ、お父さんがお母さんを殺しちゃったんだ」

「は？ お前何を――」

「ずっと気になってたでしょ？ だってこんな話をしたらみんなひいちゃうからさ。わたしは二度とお母さんに会うことはできないから、ね、だから純はお母さんに会いなよ」

純は黙っていたかと思うと突然顔をくしゃくしゃにしてすぐに後ろを向いた。

「どうしたの」

思わず純の背中に手を触れると、震えていた。

「純、あんた泣いて」

「ひくわけねえだろ」純は何度も手で目を乱暴に拭いながら、小さい声で言った。「深雪がどんな奴かって俺は知ってるのに、そんな話を聞いただけでひくわけないって」

「うん、ありがとう」

悔しいが、こいつはやはりイケメンだ。

「でも一瞬だけ、ほんの0コンマ何秒かだけ、マジかよって思った。ごめん」

「うん。いいよ」

わたしはそっと純の背中から手を回し、抱きしめた。汗臭かったが、自然と強ばっていた身体がほぐれていく。

信号が青に変わる。遠巻きにこちらを伺う無数の奇異の視線を受け流しながら、わたしは純の背中をポンポンと叩き、歩き出した。

入道雲が写っているだけのシンプルな表紙にひかれ買った小説に目を落とし、窓から見慣れた風景をなんとなしに眺める。そんな行動を繰り返していた。

ページに目を落としているのにあのときの雑踏の中にあつた純の背中が映っていた。やけに骨張っていて、当然なのだが、男なのだと実感した。

あの日から会っていないが、相変わらず誰それと遊園地に行くだの、新しくできたアウトレットモールを冷やかしに行くなど、いちいちわたしに報告してくる。

恐らくわたしと純は一生付き合うことなどないのだろう。何となくだが、確信めいたものがあった。純もきっと同じ気持ちのはずだ。

「おーい深雪。暇だ」

ジャックが小説に飛びついてきて顔をのぞかせた。

「暇って言われても……。あ、ほら図鑑読んどけば」

最近のジャックのお気に入りには図鑑だ。わたしが小学生のころに買ってもらった図鑑を与えたところ、日がな一日飽きもせず、ずっと読んでいる。

「あれ、もう何回も繰り返し読んだぞ。新しいやつ買ってくれ。ちなみにこの本の表紙の入道雲は、上昇気流が生じているところ、空気中の水蒸気が多いところに発生する。つまり晴れた日の強い日光で地面が――」

「あー、分かった分かった。もういいから」

ジャックは図鑑のおかげで知識を隙があれば披露するようになった。

「じゃあ俺はどうすればいいんだよ」

「今度新しい図鑑を図書館で借りてきてあげる」

「お一本当か。じゃあ鉱石の図鑑を借りてきてくれないか」

「鉱石？　なんでまた」

「ごつごつしてたり、綺麗な色のものがあつたり、あれは見ていて楽しい」

「そう」

何となく集中力が切れ、葉を挟んで本を閉じる。窓からは河川敷が見える。犬を連れて散歩をする者、自転車に乗っているサラリーマンが横切っていく。

この頃母を失うことになった事件に思考を割くことが多くなった。とはいってもほとんどの映像がもやがかかったように判然としない。

安藤さんが包丁を持っていたことについてもどう位置づけすればよいのか分からなかった。ただ安藤さんが母を刺した可能性は低い。なぜなら父は罪を認め、刑務所に行ったからだ。まだ断定できないが父が母を刺して、兄が隣人であった安藤さんのもとに行き、駆けつけた安藤さんが事件のあらましを聞いているときに握ったものではないか。

そんなことをつらつらと考えていると、カメラのピントを合わせるかのように、ある映像が唐突に脳裏に浮かび上がってきた。思わず動きを止め集中する。

周囲の景色の一片が剥がれ落ち、その「過去」は姿を現す。安藤さんが父が向き合っていて、

何か話している。手には血にまみれた包丁を持っている。悲壮な表情の安藤さんとは対照的に父はなぜか満足そうな顔をしていた。わたしの恐怖を和らげようとして兄が震える手で頭をずっと撫でてくれていた。

――安藤、俊明と深雪を頼む――

――ああ――

――何だ。言いたいことがあるなら言えよ――

――何でもない。……いや、しかし、何でこんなこと――

――安藤すまん、もう行く。俺は殺してしまったから――

父は玄関へと続くドアを開いたところで、目の前がぐにやりと歪む。今わたしが見ている光景が過去のそれなのか、全くの絵空事なのか何が何だか分からない。胸が苦しい。息ができない。

足を滑らせて転倒したらしい。わたしは仰向けになり、どうにもできないのに手で今胸を苦しめているものを取り出さんとかきむしる。

うめき声をあげているはずなのに、聞こえない。それでもわたしは何とか言葉を絞り出した。

ジャック。ジャック、助けて。

するとジャックがわたしの顔をのぞき込んできた。きらきら輝いている瞳、大きな耳、常に何かを企んでいるような、けれど愛らしい顔つき。幼い頃わたしはジャックのぬいぐるみをいつも手放さなかった。

「よお、大丈夫か。めっちゃ苦しそうだぞ」

トンネルで言葉を発するように、身体のなかで声が反響する。

「今俺が深雪を助ける。お前のお母さんとの約束だからな」

ジャックの顔が眼前から消えた後すぐにへその辺りが温かくなった。寒い冬の日、母がかじかんだわたしの手を握ってくれ、吹きかけられた息のそれと同じだった。同時に水中でもがくような苦しさもひいていく。ジャックが何やら対処しているらしいが顔を動かす気力もなくなっていた。

気を失う寸前、再び身体の内側で声がした。

「記憶を取り戻すことは、何かを得ることでもあるし、失うことでもあるんだよな」

「あんた何したの。言いなさい」

「なあ深雪、いい加減放してくれないか」

わたしはジャックの首根っこをつかみ、尋問していた。すでに抵抗はやめ、だらりとぶら下がっているような状態だ。

「何したのか教えてくれないと、このままどんどん力を強めるよ」

「深雪は本当に趣味が悪い――ぐえっ。落ち着けて。お、俺から言えることはこれだけだ」

わたしは首から手を放した。ジャックがカーペットで一度バウンドして、そのまま顔から突っ伏す。

「ああ、痛え。いいか。深雪はとんでもない`記憶、を持つことになってしまった。それを心配した深雪の母ちゃんが俺に深雪を助けるように、と魔法をかけたんだ」

返答はせず、深いため息をつき、眉間をゆっくり時間をかけて揉んだ。実際はわたしは頭がおかしくなってこんな幻想を見ているかもしれないと本気で考える。

「あまりにもヘビーな記憶なもんだから、キャパオーバーになってしまっただな」

「それがさっきの胸の痛み？」

「そうだ。そんなときは俺の出番さ。ちょちょいと助けるんだ。――おっと」さっと伸ばしたわたしの手を軽やかなステップでよけ、ジャックは意地悪い顔をした。「さっき何をしたかは言えないね。けどな、これは深雪が記憶を取り戻す旅なんだ。目的地の景色はお前自身で見るんだ」

「目的地って何よ」

ジャックはわたしの質問には応えずに、さあ、といったとぼけた様子で肩をすくめただけだった。

母の魔法？ 目的地？ ジャックの話は全く具体的でなく、それこそ絵本のようにある種幻想的だったが、のんきに楽しめるものではなかった。

正直なところ事件の記憶について説明しろと言われても詳細を説明できない。わたしは今も父を父と呼ぶ。記憶が曖昧であるため殺人犯であると割り切ることができないのだ。兄は、「あの人」と呼ぶ。

――深雪、あの人には絶対にしてはいけないことをしてしまったんだ。だからもう俺たちのところへは戻ってこない。いいか、お前のことは俺と安藤さんで守る。もうあの人のかんことは忘れよう――

ふいに真夜中に起き、思わずぶつめた疑問を優しく包み込むように兄はわたしを抱き耳元でゆっくりとささやいた。

いつかそれがどんどん膨らんで向き合うときがやってくるのは分かっているはずなのに、わたしは目を背けることしかできない。

――深雪、ほらこっち向いて――

父はビデオカメラでわたしや兄を撮影することが好きだった。わたしを膝に乗せ、録画したビデオを見ることが日課だった。

――深雪見える？ 今日夕陽がきれいね――

おぶってもらって、母の肩越しに毎日見ていた夕陽も思い出した。それは当時大好きだったマーメイドを丸いパンに塗ったもののようで、おいしそう、などととんちんかんな思いを抱いていた。

母の隣にはいつも父がいて、母の唐突な不思議な発言に静かに笑っていた。

ますます父が母を殺したなんてことがたちの悪い作り話のように思えてくる。

わたしは立ち止まっている気がした。乗らないといけない電車は何回も前を通り過ぎていくのに、適当な理由を作り上げ、平然としたふりをしている。

「目的地」

誰に言うでもなく、ぼつりつぶやいた。

「前にも言ったけど、そこまでたどりついたときは、俺とお別れだ」

ジャックのその言葉は別れを惜しんでいるようでもあり、いなくなったら一人で生きていくん



だぞと忠告しているようでもあった。

「安藤さん、警察を呼ぼうよ」

「警察が何をしてくれるっていうんだ。あいつらは母親を呼んでくれませんか、と面倒くさそうな顔で言うだけだ」

「そんなこと分からないじゃん」

「いや、俺は分かっている」

とりつく島もない。何とか説得しようと開きかけた口を閉じた。こうなったらどうもできないことは分かっている。

午前中にエアコンのフィルター掃除と草むしりの仕事をこなし、適当な場所が無かったので停めていたスーパーの駐車場に戻ったところ、安藤さんが赤い軽自動車の中でぐったりしている女の子を見つけたのだった。

もちろん急を要するときだということは分かっている。ただこのまま車の鍵をこじ開けたとなるとそれは犯罪だ。大事には至らなかったものの、先日の赤ちゃんポストの一件もある。

「深雪、俺は安藤さんに賛成だ。女の子の顔を見てみろよ」

純が窓のなかを指差す。柔らかそうな髪が汗で顔に貼り付いている。

感情が行き場を失ったようで思わず車の窓を叩いてしまった。

「おい深雪」

トートバッグからわたしにしか聞こえない声がした。ジャックだ。何よ、という顔をしてバッグの中を覗みつける。

「俺の職業を忘れていないか？ 俺様は鍵屋だ。こんな鉄の固まりなんて、ちょちょいのちょいだ」

数瞬思考が停止した。この前ぬいぐるみが突然しゃべりだし、奇妙な共同生活が始まり、今度は車の鍵を開けるだって？

混乱している間にも安藤さんは怒りを淡々と蓄えていく。

「外の温度が三十度を超えている場合、車内の温度は軽く五十度を超えている。どうする？ 女の子をこのままにして警察が来るのを待つのか」

安藤さんはわたしの返事を待たずに窓を叩き始めた。純も続く。

「おい起きろ、起きるんだ」

後部座席の女の子は起きない。もしかしたら既に意識をなくしているかもしれない。

「深雪、ぐずぐずしている暇はない。このままだとあの子は死ぬかもしれない」闇の中からジャックの二つの目がぎらりと光っていた。「鍵を開けよう」

「分かってるよ」

大声を出したら、安藤さんと純が同時にこちらを見た。

「ごめん。……わたし達で何とかしよう」

「よし。このまま窓を叩いてもだめなようだから、何か工具を使おう」

「ま、待って」

「何だよ深雪。まだ文句あるのか」

「違う。あ、あれ見て。多分この子の母親じゃないかな。こっちに走ってくる」

急いでジャックをバッグから出し、助手席側の鍵がある箇所にジャックを張り付かせる。あちっあちっと大声で叫びながらさっそくつなぎのポケットから針金のような工具を取り出している。

自分の身でジャックを隠しながら、戸惑う二人にあれが母親ではないかととぼけているのも束の間、いっちょあがりという言葉と共にバッグに膨らみが戻った。

急いでドアを開ける。顔を背けたくなるほどの熱気が襲ってくるがすぐに後部座席側のロックを解除し、開ける。

「開いたのか」

女の子の身体を持ち上げた途端に再び過去の映像が脳裏によみがえった。それは時間に見ればほんの数秒だろうが、いくつもの場面が対向車線を走る車のように過ぎ去っていった。

母に本を読んでもらっていた。『ジャックと人形姫』というわたしの一番のお気に入りだ。母は本の読み方がとてもうまくて、声に絶妙な抑揚をつけ、わたしの顔をのぞき込んで豊かな表情は毎日わたしを何が起こるか分からないキラキラして眩しい世界へ連れて行ってくれた。

謎の病気で人形のようになってしまったお姫様の閉ざされた心を、国一番の鍵屋であるジャックが冒険の末探し出した魔法の鍵で開けるというあらすじだ。

身体が温かい何かで満たされてじんわりと熱を帯びる。ただフラッシュバックしたその光景はまだ何かをわたしに訴えていた。それが何か分からない。ついさっきまで感じていた心地よさはどこかへ消え、以前に経験した胸の痛みを襲われた。

「おい深雪、どうした？ お腹痛いのか」

純の声が遠くで聞こえているような錯覚を覚える。呼吸するもの苦しい。トイレ、とだけ何とか言葉を絞り出し、よろけながらスーパーへ向かう。どう歩いたのかは分からない。気づくとわたしの目の前には便器があった。

「ジャック」

「分かっている。俺に任せろ」

ジャックが勢いよくバッグから飛び出した光景を最後にわたしは意識を失った。

どれだけの時間が経過したかは分からない。ただ意識が戻り、目の前に何の変哲もない真っ白なドアが見えた瞬間、鍵を開け、わたしは全速力で外に飛び出した。

木陰で安藤さんと純があの子を芝生に横たえて、声をかけている。

「お前どこ行ってたんだよ」

「ごめん」

「息はしている。救急車を待っている暇もない。病院まで車で運ぼう」

医者でなくても感じた。命が消えようとしている。女の子は物理的な大きさよりも小さくなっているように見えた。胸の奥底から何とかしないといけないという衝動が突き上げる。

一斉に車を置いている方に皆で身体を向けるとそこには息をきらせ不審でいっぱい表情を携

えた若い女性が立っていた。

「あの、何してるんですか」

驚くのも無理はないが、今はいちいち説明している場合ではない。

「母親か。一緒にこい。あんたの娘があんたのせいで死のうとしている」

普段の病院がどのような雰囲気かは分からないが、静かな喧噪に包まれながら、待合室は混雑していた。新聞を呼んでいる老人や、時間を気にしているサラリーマンなど様々だ。

わたしと安藤さん、純は言葉を交わすことなく、治療が終わるのを待っていた。母親との会話で女の子は名前を千沙というのだと知った。

母親は医者から現在の状況について説明を受けに呼ばれている。わたしはゴムでできた弾力のある灰色の床を見つめながら、車内での会話を思い出していた。

「千沙を助けてくれたことは感謝します。ただ勝手に車の鍵を開けるといのはいかなものでしょうか。犯罪ですよ」

助手席に座っている母親は安藤さんに、言葉は丁寧ながらも厳しい口調で噛みついた。腕には千沙ちゃんが抱かれていた。呼吸はしているようだが、何度呼びかけてもやはり反応はない。

「エンジンを止めて、ものの五分ほどで真夏の車は簡単に五十度は超える。何をしてたんだ」

「すぐに済む用事だったんです。それがクリーニングの受け取りを思い出して……。あなた達も分かるでしょ？ 普通だったら一分もかからない程度で終わります。それが何かの手違いで時間がかかってしまったんです」

申し遅れました。佐々木と申します。前方に顔を戻しながら、吐き捨てるように彼女はそうつぶやいた。

「ちょっとおばさん、それはないんじゃないの。この子死ぬかもしれないんだぜ」

「純」

思わずそうなだめると、純が面倒くさそうににらんできた。

「おい深雪、純の言う通りだぞ。まったくこいつは分かっていない。純もっと言ってやれ」

ジャックも純に賛同し、叫ぶ。

「そんなもの知らん。あんたはこの子を置いて車の外に出た時点で、死の危険に晒してもいいと許可したようなもんなんだよ」

「安藤さん、今は病院に行くことに集中しようよ」

「分かってる」

そこにはどうしても死がぞんざいな態度でふんぞり返っていた。もちろんその場の全員が存在に気づいているのだが、視線をやることもできず、目先のことの会話をしているに過ぎなかった。

安藤さんの後ろに座っているわたしは佐々木さんは淡いピンク色のワイシャツにタイトなスカートという出で立ちだった。仕事の合間をぬってスーパーに来ていたのだろうか。

なぜ起きないの？ と問いかけるような表情をしながら、汗ばんだ千沙ちゃんの顔にかかる前髪を何度もかき分け、見つめている。手が震えていた。

わたしは手を伸ばし彼女の手に触れた。一瞬びくっと跳ねたその手は差し伸べられた手を払うことはしなかった。身を乗り出し、心なしか冷たくなっている手を両手で包んで、言った。

「大丈夫です。千沙ちゃんはきっと大丈夫です」

罵るのは簡単だ。確かに今回の行動は非難されるべきことだと思う。しかし彼女は確かに母親だった。きっと普段は愛情をたっぷり注いで生活を送っているはずだ。

絶対に死ぬはずがない。言葉の裏に潜む最悪の結末に背を向け、必死で戦っていた。

「ありがとうございます」

目元を拭いながらも、佐々木さんは自身を制御し、気丈だった。

「――んだ」

純の言葉でわたしは記憶の海から戻った。

「ごめん」

もう一度言ってくれるよう促す。

「だから、俺を産んだ人と会ったんだよ」

純が以前に話をしてくれたときは怯えや不審が入り混じった表情をしていたのだが、今日は何かを終えたような、どこか清々しい顔つきをしている。

「そっか。どうだった」

「会うのは十年ぶりぐらいなんだ。あの人はしゃいでた。韓流スターみたいになってるねだとか、ジャニーズの誰それに似てるとか」

「お母さん、きれいだった？」

「知らねえよ。ただ、何て言えばいいのかな、同じ空間にいて、苦じゃなかった。全くの他人だとそうはいかないよな」

言葉が溢れ出していく。純は前の座席の背もたれの一ヶ所をひたすらに見つめ、まるでそこでそのときの記憶が再生されているように、視線を突き刺していた。

「訊きたいことがいっぱいあった。どうしていなくなったのか、俺のこと好きじゃなかったのか、とか。でもなかなかタイミングつかめなくて、気づいたら飯屋にいた。それで二人とも注文して、いざ食べるってなったときに、あの人が泣いてんのな」

わたしは黙って純の言葉を聞く。それで楽になるのなら、何度でも聞いてやる。

「週末の夜でけっこう周りにお客さんいるのに、ごめんなさいごめんなさいって泣いちゃってさ。お父さんよりもっと好きな人ができたから出ていったんだと。もっと何かたいしたことがあったのかと思ったんだが、しょうもないっちゃしょうもない答えだったよ」

自嘲するように乾いた笑いを浮かべる。

「その後何とかなだめて、二人とも無言で食べてるといきなりさ、こうしたんだよ」

そこでようやく純は顔を上げて、パントマイムをするように右手で何かをつまんで口の中に入れる仕草をした。そしてわたしに顔を向けて軽く首をかしげる。

「分かるか？ 俺の口についてるご飯粒を食べたんだ。あの人がすぐに我に返ったように顔を真っ赤にして、またごめんなさいごめんなさいって始まっちゃって、思わず笑ったよ」両足を投げ出し、背もたれに身体を預ける。ようやくいつもの純の笑顔を見せる。「それで、思った。ああ

、この人は俺のお母さんなんだなって。そう、思えたんだ。はい、チャンチャン。これで終わって、吹っ切れた。俺は俺で生きていくし、お母さんもどこかで平穏に暮らしてほしい」

「会って、よかったじゃん」

「……ああ。そうだな」

「おい」

安藤さんが指し示したほうを見ると、佐々木さんが手招きをしていた。わたし達は慌ただしく席を立つ。

「千沙が意識を取り戻しました」

佐々木さんはほんの少しの時間でやつれたように見えた。意識を取り戻したことで張りつめていた気持ちが抜けた反動かもしれない。

「とても暑かったって。お母さんどこに行ってたの遅いよって怒られました。もう、もう本当にあの子を車に置いたりしません。ありがとうございました」

「当たり前だ」

「すみませんこんなんです。よかったなってこの人は言ってます」

「うるせえ」

純の補足に安藤さんは恥ずかしそうに拳を振り上げた。

小学生の頃の話だ。黒で染まった筆を筆洗に入れると、一瞬で真っ黒になる。安藤さんと兄の仲はまさにそんな様子を見ているかのように急速に悪くなっていった。一見すると何事もないようなのだが、今まで三人で暮らしてきたのだ、決して小さくないひびに気づかない訳がない。

その夜は特に声が大きく、はっきりと内容も聞き取れるほどに兄も激昂していた。そんな状況で兄の放った一言にわたしはベッドから飛び起きた。

「父さんに会わせてもいいじゃないか。もうあの人は十分に罪を背負った。深雪と会う権利がある」

兄が父のことを「父さん」と言っている。

「会わせないとやってるわけじゃない。いきなり会わせても深雪を戸惑わせるだけだ。まず会わせる時期を考えて事前に深雪にもきちんと説明しようと言ってるんだ」

「そんなの知らないよ。時期なんて考えていたら、一生会わせることなんてできない。それにあいつの気持ちなんて誰にも分からないよ。行動しなきゃ何も始まらない」

そこまで話を聞いてわたしは自身をとにかく落ち着かせることを考えようとしたが無駄だった。どたどたと音を立てて階段を降りている。

ドアを開けると、しまったという顔をしている兄と、そんな兄にそらみろ、と言うように兄を一瞥し、深く息を吐く安藤さんがいた。

「どういうこと？」頭が混乱していた。「あの人とか言って憎んで、もう忘れようとか言ってたくせに、今度は会わせたいってどういうつもり？」

兄はといえば落ち着いているように見えた。少し笑みさえ顔に浮かべているようだ。

「何で笑ってんの」

これだ。わたしは最近この顔が嫌いなんだ。

「いつもそうやって何があっても大丈夫だみたいな顔して、わたしのことは全て分かっているような雰囲気出してさ。それが嫌なの。わたしはお兄ちゃんの自己満足を満たす道具じゃない」

「深雪、少し話をしよう」

「嫌だ」

この期に及んでも若干の動揺はあるものの笑みを絶やさない兄に更に怒りが湧いた。別にそうしてほしくないのだが、安藤さんも止めに入ろうともしない。

「わけ分かんない」

わたしは靴を履き、タックルするようにドアを開け、外に飛び出した。

鈴虫の鳴き声、さらさらと流れる水の音が気持ちをいらつかせる。当然のように河川敷はこちらの都合なんて関係なくいつものようにわたしを迎えた。

裏切られたというよりも頭が混乱していた。兄が父と会っていた？ なぜだ。父は母を殺したのだ。そもそも出所していたことも知らなかった。

「深雪」

振り向くと安藤さんが立っていた。息をきらせて肩で息をしている。

「こないで。一人がいい」

わたしの言葉など耳に入っていないのか安藤さんはどんどん近付いてくる。

「だから――」

「話を聞いてくれ」わたしの身体を軽々と持ち上げる。「言うことを聞かないと」

「ちょっ」

「このまま川へ投げ込むぞ」

星空しか見えない状態だった。確かに安藤さんの怪力を持ってすれば川へ投げ込むことなど容易だ。それにこの人は冗談ではなくて本気でやりそうな気がする。

「分かった。分かったからおろしてよ」

重力が戻ってくる。身体がしばらくフラフラした。わたしと安藤さんは野球ができるグラウンドへと続く階段へ腰を下ろした。

「俊明が会っていたってのはあれだ。養育費を受け取るためだ」

「お母さんを殺した人のお金で育ったの」

「何度も断ったんだが、どうしてもと言われ、月に一度受け取っていた。無理に断るとお前に会いにきそうな勢いだったからな。それにそのお金は一切手をつけていない。貯金してある」

恐らくあの水族館で受け取っていたのだろう。

「ずっと黙ってたんだ」

安藤さんはわたしに身体を向け頭を下げた。こんなことをされたのは初めてだ。

「すまなかった。一つ聞いてほしい話がある。色んなことを考えていると思うが、少しの間全部まっさらにして聞いてほしい」

「何の話」

「お前の父さんと俺の話だ」

「.....別に、話してもいいよ」

意図は分からないが、安藤さんなりにわたしに何か伝えたいことがあるのだと、確信めいたシグナルが頭の中できらめいていた。

「お前の父さん――登とは最初はお隣さんでただの顔見知りだったが、なぜかあるときから出勤や洗車、商店街で買い物をしているときなんか気さくに声をかけてくれるようになった。正直面倒くさかったが、おもしろい男だなと思って打ち解けたのは店で熱帯魚を何の気なしに眺めていたときのことだ」

彼方から、父の声も立てず静かに笑っている顔が不格好な輪郭で浮かぶ。今にして思うとそれは、少々の不安や心配事をやすやすと飲み込んでしまいそうな光だった。

「『そんなでかい図体して熱帯魚が好きなんだ』って言われて振り向くと、登がいた。こちらが聞いてもいないのに俺の好みを聞いて、熱帯魚を勧め、飼育法まで.....。周囲のお客さんがこっちを見てて、慌てて止めたよ。店の外へ引きずりながら、最後にあいつはぼそっと俺の顔を見ながら、『でもあいつらは水槽の中で生まれて、死んでいくって考えると悲しくないか?』だと。変な奴なんだよ」



そう言う安藤さんはなぜか少し嬉しそうな顔をしていた。水槽の中を軽やかに泳ぐフルレドの、マントのような尾びれを優雅にたなびかせながら泳ぐ様が目に浮かぶ。

「俺はな、一度死のうとしたことがあるんだ」

一瞬呼吸が止まる。

「……意外」

「どういう意味だ。まあ、いいや。俺は今じゃ児童虐待がどうだと色々首を突っ込んでいるが、前は家族に暴力をふるっていた」

反射的に顔を安藤さんへ向けるが、こちらを気にする様子もなく、淡々とした様子で話を続ける。

「何も考えていなかった。こういう性格だ。気に入らないことがあったらすぐに手を出して感情をぶちまけていた。それで生活が継続できていたもんだから、少し反省することはあっても何ら問題ないと考えていた」

片方の手で掌をゆっくりとさすり、見つめる。捨てる直前の腐ってしまった食べ物を見るような目つきだった。

「あるとき、妻を殴った拍子に机の角に額をぶつけて救急車に運ばれて大騒ぎになったことがあった。警察にも少し事情を聞かれた。でも暴力がやむことはなかった。その件があったことで俺はなぜ暴力をふるうのか考えた」

犬の散歩をしている人が通る。自転車に乗ったおじさんを犬が引っ張っているようだった。「快感だったんだ。……おかしいだろ。家族を殴って気持ちよくなっていたなんて。だからな、深雪。俺は父親なんかじゃない。子供が産まれてからも父親じゃなかったし、これからだって一生父親にはなれないんだ」

兄とわたしが安藤さんの家に預けられたときを覚えている。

山の木々の間からのそっと出てきそうな体躯をしている大人に恐怖していた。

——これからは俺のことを安藤さんと呼べ——

安藤さんは兄とわたしに手をあげたことはない。共同生活に慣れてからは面倒くさいと思うことはあっても、恐怖を感じることはなかった。

「どうか見損なってくれ。これが俺の本当の姿だ。虐待についてああだこうだ言っている奴が昔は虐待する側だったんだ。もう、どう思われようといいんだ。許してほしいとか、改心したとか塵一つも考えていない。俺は一度死んだ身だからな」

「死んだ？」

「ある日妻と子供が車で買い物に出かけた。深夜になって病院から事故で二人とも死んだと連絡がきた。何のつもりだったんだろうな、お前の父親にそのことや今まで暴力をふるったこともあらいざらい話して、近くの雑居ビルに向かった。屋上のフェンスに手をかけたとき、俺を呼ぶ声がして振り向いたら、登がいた」

暗闇に怪しく光る川面を見つめ、安藤さんは昔語りを続ける。微動だにせず口だけを動かす姿はわたしにはではなく、すぐ目の前にいる自身に向かって話しかけているようだった。

「卑怯者と言われたよ。逃げて早く楽になりたいのかって。逃げたくても、楽になりたいくても生

きろって怒鳴られた。生きて、苦しんで、苦しみ抜けって。そんな人生でも、どんなにつらくても必ず生きていけばいいことがあるって言うてくれたんだ。俺はなぜそこまで俺のことを気遣ってくれるのか聞いた。するとあいつはこう言ったんだ」安藤さんは宝物を見る子供のように、顔を綻ばせ、歯を見せてこう言った。「『お前は小学校のときに飼ってた犬に似てるんだ』って。やっぱり変な奴だよ」

食いしばっている歯をつたっていくつかの雫が丸々とした二つの膝に落ちた。安藤さんはわたしの方を向き、一つ一つの言葉を子供に言い含ませるようにゆっくりと言った。

「俺はあいつのおかげでここまで生きてこれた。深雪も俊明がいたからここまで頑張れたんじゃないか」

「もちろんお兄ちゃんには感謝してる。でも今回は訳が違う」

安藤さんは何も言わない。わたしの言い分ももちろん理解しているのだろう。わたしはさらに混乱していた。安藤さんの言葉が紡ぐ父は殺人を犯す人ではない。ではなぜ――？

「そうか。まあ、もうすぐあいつがくるさ」

その言葉を待っていたかのように、遠くからわたしの名を連呼する声が聞こえてきた。深雪の「き」の部分でもかかと伸ばし、辺りに悲鳴を轟かせている。

足をもたつかせながら何とかわたしの前までたどりついた。地面に手をつき、息もたえだえになっている。

「深雪……ごめん。いつも笑ってて……ごめん……嘘ついててごめん」兄がこちらを見上げる。何かに怯えるような顔つきだが、瞳は確かな決意の色を帯びていた。「だから、だから言うよ」

「俊明お前――、やめろ」

すごい形相で安藤さんが兄につかみかかる。

「母さんを殺したのは」

え？

「母さんを殺したのは、深雪、お前なんだ。その日はお前の誕生日で、俺と親父は足りないものがあつたから買い物に出かけた。帰ってきたら血がついた包丁を持ったお前がいて、母さんが血を流して倒れていた」

二人とも脱力し、地面にへたり込む。

「え？ え？」

わたしの問いに答える者はいない。

\*

人殺し。当然のごとく、わたし達のあだ名は用意されていた。上履きを隠され、机は教室から出され、教科書をはさみで切り刻まれる。日々繰り返される、次から次に披露されるいじめショーは感心すらさせるほど、無邪気であり、狡猾さもあつた。

兄は、やはり笑っていた。

――だから、やめろって。お前ら飽きないなあ――

——おお、効いたわ、パンチ。後から腹に響いてくるな——

暴力をふるわれても、そのスタンスは変わらなかった。やはりわたしはそのときも怒っていた。なぜ笑うのか。なぜ悪に拳を振り上げないのか。

「深雪、笑ってりゃ何かいいことあるって」

笑うわけがない。しかし兄の笑みがだんだん気味悪くなったのか、わたし達は結果的に孤独という平穩を手に入れた。

兄の柔らかな手の感触を覚えている。いつものようにいじめられ、泣きじゃくっているわたしの手を包み込むように握って、どんなに嫌がろうとも決して放そうとしなかった。ほどこうとする手を何度も何度も強く握り返してきた。

目を覚ますと兄の背中があった。伝わってくる体温が心地よい。目の辺りを指で触れ、泣いていたことを知った。

「暴れて大変だった。あんなこと言われたらしょうがないな」

兄の声は少しだけ耳にとどまり、やがて頭の中にしみ込んでいった。隣には安藤さんがいた。先ほどの鬼気迫る表情は消えている。

わたしは何か言葉を発しようにも、身体が思考することを拒否していて出てこなかった。

「六歳の誕生日だ。ケーキを切るためのナイフを持ってお前がなぜか窓の縁を歩いていた。母さんが助けようと手を広げたところにナイフを持ったまま飛びこんだ」

救急車も呼んだが、病院に搬送される前に自宅で死亡が確認された。

「父さんがそこで俺が身代わりになると言った。俺も安藤さんも最初は止めたが最終的にはそれが深雪のためになると思って、今日まで隠していた」

やはりわたしは何も言うことができなかった。兄の背中に顔をうずめ、ゆっくりとした上下運動に身を預ける。それから自宅に帰るまでわたし達は言葉を交わすことはなかった。

「深雪どうした？ 何かあったか？ その顔は何かあったって顔だな」

ジャックが背中に飛びついてくるが取り合うことなく、わたしはクッションを抱いて体育座りする。

「おーい、深雪返事しろよ」

「お願い黙って。背中叩かないで」

「何だよー」

わたしは相当な阿呆なのか、身体が自身を守るための逃避なのかは定かではないが、眠ってしまい、夢を見た。そこは以前に住んでいたリビングで、わたしは家族皆で食事をしていたテーブルに座っていた。隣にはジャック、そして目の前には母がいる。

「びっくりした？」

唾然としているわたしを面白いように茶目っ気のある笑みをたたえ、母はそう言った。死者の服とでもいうのだろうか、母は真っ白なワンピースに身を包んでいた。

「うん」

「もう、聞いたのね」

「お母さん、わたし何で――」

「ごめん深雪、それは言えないの」

「そうだぞ。すぐに答えを求めるのは深雪の悪い癖だ」

嫌だ。もう何が何だか分からない。

「ねえお母さんお願い。教えて、わたし何であんなこと」

わたしが抱きつくとも母から少しずつ光が溢れだしてきた。

「深雪、あなたなら絶対に気づくはずよ。よく考えてみて。あなたの近くに必ず答えはある。

ジャック、ちゃんと深雪を助けてくれる？」

「もちろんさ。なあ深雪？」

「全然分からないよ」

「ヒントをあげる」

母がいいこと思いついたというように顔を輝かせ、人差し指をぴんと立てた。

「おい、いいのかよ」

「いいのよ。だってジャックあまり役に立ってなさそうなもの」

「ちえっ」

母から発される光はその濃さをどんどん増していく。

「そうね……。謎を解く鍵は二つあるわ。一つ目は、ありのままを切り取って、永遠に残せるものは？ もう一つ。あなたは何かを求めて窓の縁に立ったの。あら、言いすぎちゃったかしら」

「あちゃー、大ヒント出ちゃったな」

わざとらしく顔を覆うジャックに焦りを覚えながら、わたしは更に強く母を抱きしめる。香水や、洗濯物の匂いではない、石けんに似た、母だけが発する柔らかな匂いがした。

いよいよ光が母を飲み込もうとしていた。なす術がなくわたしはその光景を見つめることしかできない。

「深雪、あなたは何も悪くない。何も考えず、前へ進むことだけを考えていればいいの」

目を覚ますと、抱いていたクッションが湿っていた。静けさがどうしようもないくらい寂しさを増し、みじめな気持ちになった。ただ母が出してくれたヒントについて、おぼろげなイメージはぽかんと浮かんでいた。

携帯がメール受信を知らせる。純からだった。明日遊園地に行かないかという誘いだ。こんなタイミングでメールがくるのは何か純らしいなとぼんやり思った。

気がつくともわたしは了解の旨を返信していた。

お前が

---

「案外人が多いんだ」

「住宅街の中にあるし、入園料は安い、おまけに遊具施設も観覧車や、ゴーカート、メリーゴーラウンドと一通り揃ってる。手っ取り早さがいいんじゃないか。おい、そんな目で見ろな。俺は決して手間を省いてここにしたんじゃないぜ」

「じゃあどういう意味よ」

「以前に母親と来た記憶がある。ふと思い出したんだ」

「へえ、そうなんだ」

昨日突きつけられた事実には蓋をして、何食わぬ顔をして平静を装っていた。あまりにも現実離れしすぎて、信じられないという理由もある。

「で、今日は何の用なの？」

「おいおい、いちいち言い方がきついな。単純に遊ぼうって話だよ。こんな機会めったにないだろ？」

「わたしだってデートぐらいするわよ」

「はいはいそうですか」

さして意味のないやり取りが気分を落ち着かせる。同時に重大なことから目を背けることに罪悪感を覚えた。もしかしたら、わたしはもっと昔からそうしていたのかもしれない。記憶が無いに関わらず、父が母を殺したのだと盲目的に信じ、少しも疑おうとしなかった。

「ゴーカート乗ろうぜ」

わたし達はお互い初めて付き合った者同士のように極めて初々しく、健全に楽しんだ。しかし限界はすぐに訪れた。所詮砂を固めて作ったダムだったのだ。

わたしは空気で膨らんだ熊の形をしたドームに入って、ふわふわした床を子供たちと共に飛び跳ねていた。

突然しゃっくりが始まったかと思うとそれは嗚咽で、涙がとめどなく流れてきた。

「おい」

純が飛び跳ねたまま、困惑する。

大丈夫、と言おうとしても無理だった。わたしの様子に影響を受けたのか周りの子供まで泣き出した。

純が隅まで連れていってくれて、ようやく泣き止んだわたしは事の次第をゆっくりと途切れ途切れに伝えた。

父ではなく、わたしが母を死においやったこと。母の夢については半信半疑だが、ある物を調べれば、その理由について分かるかもしれないということ。ただこれ以上何らかの事実を知ることは一。――

「何だ」

「怖いなって」

純がうつむいて黙りこんだ。

「ねえ、どうし」

「一言言った」

「え？」

「俺が母親に会うか会わないか迷っているとき、お前は何て言ったと訊いたんだ」

ものすごい力で純が両肩をつかむ。痛い。

「あ、会ったほうがいいんじゃないかって」

「深雪は悲しいこともあるかもしれないけど、希望もあると思って、そう言ってくれたんだろ」

「……うん」

「うじうじしてた俺の背中を押してくれた奴が何悩んでんだよ。俺はお母さんと会えてよかったよ。心からそう思えたよ。深雪、今度はお前の番だ。お前はお父さんとお母さんのこと好きだろ？」

わたしは貫くような視線に負けないように、純の目をしっかりと見据え、ゆっくりと力強く頷く。

「人から聞いたことではなくて、かりそめの想像でもなくて、自分の目で見て、考えて、死ぬ気でしぼり出した真実を知りたいんだろ？」

純の掌から熱を持った感情がわたしの体内に入ってきたように様々な思いが全身にほとぼしる。母の魔法、父の残像、兄のむかつく笑顔、安藤さんの無愛想な顔、自身の身長ほどもある鍵を振り回すジャック。記憶の断片が何枚もの写真のように眼前に駆け巡る。再び目を背けたくなるものもある。でも、そのいくつもの断片全てがわたしを構成しているんだ。一つだって欠けちゃいけないんだ。

「うん」

「だったら答えは出てるじゃねえかよ。お前がやりたいようにやればいいんだ。大丈夫、お前の過去にも未来にも、正真正銘の残酷な真実なんてないよ」

「適当すぎだ。ばか」

「そんなことはどうでもいいんだよ」

純がわたしの背中を思い切り叩くものだから、わたしはスーパーボールのように飛び跳ねた。それを見て、さっきまでもらい泣きしてた子供たちが今度は笑い出した。それを見て純も笑う。

人は絶望の淵にあっても笑うことができるのだと知った。いや、もしかすると希望や絶望なんて騙し絵のようなもので、見方を変えれば、その人が心からそう思うことができれば、怒った顔にもなったり、きっと笑顔にもなるのだ。

ソニー製の古いハンディカムにつなげたケーブルをTVに接続した。液晶画面が過去を再生する。休日だろうか。母がわたしに絵本の読み聞かせをしている。奥には一人で車のおもちゃで遊んでいる兄が映っている。そして撮影している父の快活な声が聞こえる。

真実の扉への手がかり。ビデオテープの存在をわたしは記憶の奥底に押し込んでいた。そこにあるのは光か闇か分からないが、目の前の過去と向き合わないといけない。

「懐かしいな」

そうつぶやく兄の顔は歯を見せても、目は画面をただ見据えているだけだった。

安藤さんはすでに寝ている。一緒に見ないかと誘ったが、お前ら兄妹で見ろ、と言われ、わたしは、そう言うと思った、と返事をした。

母は絵本の一行一行を読みたびにわたしの顔をのぞき込んだり、絵を指差したりしている。小気味よく飛び出す言葉は一つ一つが意思を持っているように耳に暖かな余韻を残し、溶けていく。

「……そしてお城の大勢の者がいる前でジャックは大臣の頭に飛び乗り、大きな声でこう言ったのです。『お姫様の呪いを解く鍵を手に入れたぞ』。従者や、兵士、コック、みんな大きな声で喜びました。ジャックを皆で担いでお姫様が眠る部屋まで連れて行きます」

「ほら、深雪見て、ジャックがみんなの手の上に乗ってるよ」

——お姫様、お姫様！ ジャックが鍵を見つけましたよ。ほらジャック早く鍵を——  
——分かってるよ、ったくうるせえなあ。……あらよっと——

ジャックはひょいと飛び降り、軽やかに地面に着地すると、深い眠りにについている少女の前にはうやうやしくひざまずき、背中に背負っている自分の身長ほどもある鍵を手に取りました。

——いくぜ——

突然お姫様のお腹が光りだしました。皆はまたいっせいに声を出して驚きます。よく見ると鍵穴の形に光っており、ジャックが持っている鍵も太陽のようにまぶしい光を放っています。

——おいおいジャックもしてかしてそれをお姫様に刺すってのかい？ 刺しても大丈夫なのかい？——

——お前らは気にしなくてもいいんだよ。俺に任せておけば万事解決なんだ。いいか、これは呪いを解く鍵だ。目ん玉ひんむいてよく見とけ——

鍵がお姫様のお腹の中に吸い込まれるようにして入っていきます。するとお姫様の身体が、びくん、と一度飛び跳ねました。命の火が消えたように青白かったお姫様の顔にみるみる赤みがさしていきます。そしてゆっくりと目を開きました。

——我らのお姫さまが戻ってきたぞ！ ——

——何ということだ！ ——

——ジャック、お前は英雄だ！ ——

年に一度のお祭りのときのように皆は手を叩き、歓喜し、歌をうたったりしました。あまりの

ことに泣く者までいます。

——みんな、せいしゅくに！ せいしゅくに！——

その場の者を黙らせると、ジャックはもう一度礼儀よくお姫さまにひざまずき、言いました。

——お姫様おはようございます。いい夢は見れましたか？ 眠気覚ましに外の空気でも吸いにいきませんか——

お姫さまは突然のことに目をぱちくりしていましたが、すぐに微笑んで、差し出された手に優雅な仕草で陶器のように白い手を乗せました。

「お兄ちゃん」

「うん」

「わたし分かった気がする」

「俺もだ」

母は、窓の縁を歩いているわたしを発見したとき、恐らくいつも読み聞かせをしていたこの本のことを思い出し、とっさにお姫様のふりをしたのではないだろうか。その日は誕生日だったので、包丁はケーキを切るためにテーブルの上に置いていあって、それをわたしはつかんでしまったのだろう。

——ジャック、ほらわたしのお腹に鍵をさして——

わたしはその言葉に反応し、ナイフを持ち母のお腹に飛び込む。

ジャックの行動がよみがえる。過去の記憶の一片をふいに思い出し、痛みに苦しんだとき、ジャックは鍵をわたしのお腹に刺していたのだ。わたし自身が記憶を取り戻さないといけないとジャックは言っていた。「お腹に鍵を刺す」という行為はその記憶に深く関わっているのだから、何をしたのか言えなかったのだろう。

「わたし」こんなこと後悔してもしきれるものではないが、再び、なぜ、が押し寄せてくる。「何で窓なんかに登ろうと」

兄がTVに目を向けたまま、わたしの肩を抱き寄せる。

「深雪、もうくよくよ考えるのは無しだ。最後の瞬間までお母さんはお前を愛していたことが分かったんだ。それでいい」

「でも」

「深い、雪、って漢字を学校で習ったことがきっかけで、お前の名前の由来を母さんと親父に聞いたことがある。お前は俺の隣で寝てたけどな」涙のせいで歪んだ世界でも兄の、子供が何かいいはずらを思いついたように無垢な笑顔はいつものようにそこにあった。「どんなに深い雪の中からもきれいな芽を出すような元気な人間に育ててほしいから、だってさ。なあ、このまま深い雪の中に埋まってるつもりか？」

わたしは歯を食いしばって首を振り、全力で否定する。

「だよな」

わたしと兄は再び、母の声に身を委ねる。突然こちらに話しかけてくるんじゃないか。そんな甘い想像をしながら。



## 窓から見えるもの

---

「うわ、やっぱり埃っほいなあ」

家族四人が住んでいた一軒家は、時の流れから解放され、今は息をひそめて久しぶりに訪れた主人を見つめているようだった。兄とわたし以外に何者かの気配を感じるのだ。

事件が起こった後、家は売りに出されたのだが、事情が事情だけに買い手は現れなかった。草が好き勝手に育った庭を通り、スプレーで「人殺し」と殴り書きされた玄関の引き戸を、管理している人に心の中で謝りながら、石でガラスを割り、鍵を開け中へ入った。

完璧に蓋をしていたはずの記憶はビデオを見たことによって開けられたのか、リビングのどこを見ても、眼前に様々な場面が現れてくる。

「……お前が歩いてた窓って、あれだよな。確かあの窓の下に小さなすべり台を置いていた。それをつたって登ったんだろうな」

リビングにある唯一の出窓だった。いたずらで割られないようにするためか、板が打ちつけられていて、隙間からはほんの少しの光が漏れている。

「壊そう。何か分かるかもしれない」

「え、でも」

兄は突然リビングを出ていき、金属バット持ってすぐに戻ってきた。「まだあった」と笑う。

だん、だん、だん。板を叩く音が室内に響く。みしっという音や兄の、徐々に荒くなっていく息がその場を支配する。

二重にでもしているのか、板はなかなか割れない。

「くそっ」

光の量が増していく。兄はバットを杖代わりにして息を整える。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だ」

再び板に全ての体重を乗せたバットを叩きつける。

だん。

「深雪」動作を続けたままで、兄はわたしの名を呼んだ。「正直に言う。俺は一時期お前を恨んでいた。母さんが奪われ、親父も刑務所に行った」だん。「人殺しといじめられて、それでも俺はお前を守らないといけない。親父にそう言われたし、それが母さんの望みでもあっただろうから」

だん。額からつた汗を拭う。

「頭がおかしくなりそうだった。本当のことを言おうとした自分を何度も必死で止めたよ。でもそんなの、どうでもよくなった」

うおお、という叫び声と共に何度も壁に打ちつける。小さな木片が頬に飛んできた。肩を上下させ、兄はふらりとした動作で尻餅をつくように座る。立ち上った埃で視界が曇る。

「あるときいつものように三、四人ぐらいの同級生からいじめられてた。俺はそれが日常になっていて、お前をかばいながら、いつまでこんなことが続くんだろうと今後のことについて、後ろ

向きに冷静に考えていた。

すると小さく座り込んで、えんえん泣いていたお前が急に立ち上がった。さっきとはうってかわって何だか覚悟を決めた表情になっていた。いつの間にか取り出した白いチョークで同級生の周囲をきれいな円で囲んで、丸やら三角やら四角を使って幾何学な模様を描いたり、かと思えば木や蛇や魚や鳥の絵もあつという間に慣れた手つきで加えて、魔法陣と言えればいいのか、とにかくヘンテコな代物を完成させたんだ」

「……覚えてない。何それ」

わたしの知らないわたしが、わたしが目を背けていたわたしが再びゆっくりと目を覚ます。

「そうか。挙動が普段のお前のそれとは違って、神がかってるものを感じたから、そのときだけ別な何かになっていたのかもな。自然の力や動物さんの力を借りるの、とか言ってたから」

「それで、わたしその後どうしたの」

「今にも泣き出しそうな悲しそうな顔で、『これは最期の手段なの。今この陣の中にいる者はこの後ものすごい下痢になります』って言ったんだ。俺は呆気にとられていたが、一人がお腹痛いかもって言い出して逃げ出すと、それに他の連中も続いて、俺たちは助かった」

「それは」

情景が目に浮かぶ。

「今考えたら爆笑だろ。家に帰って聞いたらお母さんに習った。もし深雪をいじめる奴がいたら、どうしてもやめてくれなかったら使ってもいいって言われたから発動したって苦々しい顔で言ってたよ。

行き止まりだと思っていた壁に扉を見つけたようだった。確信していた。母さんが深雪の中にいるって。その母さんの、父さんの俺は息子で、そして妹は深雪なんだって、ずっと胸に落ちた。吹っ切れたんだ」

忘れたとしても、蓋を閉じていたとしても、取り戻せる。兄が、安藤さんが、そして父がいる限り。

「俺がこれからも絶対に守るから」

兄は深呼吸をしたあと、バットを強く握り直し、大きく振りかぶる。

「……うん」

だん。

「絶対絶対、何があっても守るからな」

「うん。分かってる」

だん。だん。だん。

バットを上段にふりかぶり、板に叩きつける。その動作を兄は何度も何度も繰り返した。大小いくつもの木片が足下に転がる。やがて窓は、その本来の役割をようやく取り戻した。

「そうか」兄がつぶやく。「そうだったのか」

そう言うなり、その場に座り込んでしまった。

日課だった。毎日毎日その時間になると母とわたしは外に出て、河川敷を歩きながら、それを眺めていた。

「お前、好きだったもんなあ」

窓からは、握り潰すと大量の甘い汁でもしたたってきそうな、熟れた太陽がわたし達を見ていた。

\*

自室に戻るとジャックは無言でわたしを迎え、それこそぬいぐるみのようにちょこんとベッドの上に座っていた。両手足をまっすぐに伸ばす格好だ。

「何してんの」

ジャックは動かない。

「ねえ。……あのときの記憶戻ったよ。ちょっ」

そこでわたしは、はたと思い出した。わたしは `目的地、までたどりついた。

——そこまでたどりついたときは、俺とお別れだ——

「ふざけてるんでしょ」

小さな肩をつかむと絶望的なまでに軽かった。母の `魔法、が解け、もとのぬいぐるみに戻ったのだと静かに確信する。以前に感じていた、あの重さは魂がこもっていた証拠とでもいうのか。

「勝手に動き出して、突然ぬいぐるみに戻ってさ」わたしはいつかのときのように、ジャックの両足を持って逆さまにする。「このまま壁に思いきりぶつけるよ」

おい冗談だよ、早く下ろしてくれ。

そんな言葉を発することはなく、ジャックは大きな二つの目玉を虚空に向けるだけだった。

少しでも生きている証拠を探そうとわたしはジャックの頭に鼻を近づけ匂いをかいだ。学校から帰宅し、着替えるときの、ちょっとだけツンとくる汗のような匂いがして、わたしはそれを逃がさないようにいつまでもジャックを抱きしめていた。

## お出かけ

---

準備を整え、リビングへいくと、兄と安藤さんが朝ご飯を食べていた。普段安藤さんはそうする必要は特にないのだが、兄に合わせている。

「深雪、おはよう。この時間に降りてくるなんて珍しいな。お前もご飯食べるか」

「おはよう。うん、食べる」

「早いな。出かけるのか」

安藤さんがそう言って味噌汁をずずずとすすむ。

「うん」

兄が素早く目の前に朝ご飯を準備してくれる。いつまでも兄におんぶされているわけにはいかない。心の中で頭を下げる。

ご飯、ソーセージエッグ、味噌汁、明太子。どんどん食欲がわいてくる。いただきます、と手を合わせ、箸に手を伸ばす。

「あ、そうそう。佐藤さん覚えてる？」

しばらく食べ進めていると兄が話しかけてきた。

うん？　と言って、数秒で記憶の中から該当のものを探した。まだ一ヶ月もたっていないのに、だいぶ前のように感じる。

「うん。カウンセリング受けてたんだっただよ」

「そうそう。それでさ」兄は十分なためを作って、テーブルの下に隠していたものを見せてくれた。

「じゃーん。佐藤さんから手紙を頂きました。奈保子ちゃんと二人でこれからも頑張れそうだって。読む？」

「いや、いい」

「なんだよー」

「これはお兄ちゃんが読んで、お兄ちゃんがずっと大切に持っておけば、それでいいの」

手紙が入って少し膨らんだ封筒を触ると面白い感触が返ってきた。繊維が繊維だと分かるように漉(す)かかれていて、いい塩梅の凹凸が指に心地よい。佐藤さんが手紙を書く前に文房具屋で頭を悩ます光景が浮かんで、わたしはそれでもう十分だった。

「深雪」

安藤さんが声をかける。

「うん」

「必ずお父さんは戻る。それまでは一緒だ。もし登が戻ってきたら、俺は再び最強の隣人になる」

「何それ」

安藤さんは素知らぬ顔で味噌汁をすすむ。兄がそれを見て笑っている。

やがてわたしは感謝をしながら、朝食を食べ終える。

「ごちそうさま」

食器を流しにおいて、鞆を肩にかける。行ってきますを言うために振り向くと兄と安藤さんがこちらを見ていた。窓から差し込む朝の光が室内を満たしている。

兄はいつものようにこちらがいらいらするほど暴力的な笑みを絶やさず、安藤さんはこういう場面が苦手なのだろう、仏頂面でこちらを見ている。

「行ってきます」

行ってらっしゃい。いびつに揃った二人の声を背中で受け止め、わたしは光の中に飛び出した。

牧野登はその日、かぜになったイルカの治療をするため、薬の用意や注射の用意のため、普段より慌ただしい時間を過ごしていた。

この水族館で働くために尽力してくれた園長の努力もむなしく、登のここで働くまでの経緯が館内の者へ、少しずつ広がっていた。

ここを去る日も近いことを自覚しつつ、日々を消化していた登にとっては、悩みを忘れさせてくれる出来事だった。

イルカは人になつく。猫と同じ性格だという者もいる。必要なものをバケツに持って水中を我がものとしている優雅な泳ぎにふと見とれていると、一頭のイルカが近寄ってきた。何をしているんだ？ とでも聞いているかのように首を傾げたり、鼻先をくいと何度も上げる仕草が何ともたまらない。

「かわいいですね」

「はい。イルー」

イルカは人になつくんですよ、と枕詞のように何度も訪れた客に話していることを反射的に言おうと横を向くと、自分の娘がいた。

あまりの驚きに言葉を失った登に娘が、深雪が、どうしたんですかと訊く。こちらの反応にさして気にとめていないような素振りだったが、瞳が揺れていた。

「いや、失礼しました。イルカは人になつくんですよ。ほら今もこんな風に私に遊んでとせがんでいる」

「へえ。かわいい」

そう言ってイルカに近づき、透明な板を指で叩く。登は思いもよらない目の前の光景に目眩さえ覚えていた。十数年ぶりに会った娘は大人の女性になっており、一目で真っすぐに成長したと分かる姿をしていた。

「なんだか、わたし達を同じ生き物だと思ってるみたいにじゃれてきますね」

「あなたが間違いではないかもしれませんが。実はイルカだって、かぜひくんです。人間と同じ薬を飲む場合もあるんですよ」

「ええー、知らなかった。さすが飼育員さん」

そう言って深雪が笑うと、えくぼが片方だけできた。

「事件」が起こる前に自身がにらんだ通り、やはり深雪は母親似だったと確認できたことに、表現しがたい感情が四肢に駆け抜けた。同時に登は混乱していた。なぜ今日、深雪が現れたのだろう。俊明と会っていることを知ってしまったのか、それとも、真実にたどりついたのか。

「他にもイルカのこと教えてください」

興味津々という表情で訊いてくる。目の前にもやもやと立ちこめていた考えが霧散した。今は、これでいい。

「では一つお話を。ある日三頭のイルカが砂浜で無残な姿となって発見されました。親子と見られ、それだけであれば、特に大きなニュースにはならなかったのかもしれませんが」

深雪は真剣に話を聞いている。

「ただ、何日か前にニュースになったことを覚えていた人が指摘したことで、その三頭は再び人々の注目を集めることになりました」

ふと、あのときの光景がフラッシュバックした。血だらけになった志穂の側で泣きも叫びもせず、放心状態で血がべっとりと付着した包丁を持っている映像だ。

「イルカは家族が困ってたら全力で助けるんです。サメに襲われて瀕死の重傷を負って沈んでしまいそうなイルカを家族全員で身体を押して息継ぎを助けていたというニュースを数日前に報道していたんです」

深雪は遠い目をしながら、しばし黙った。

映像は終わらない。小刻みに震えている深雪を優しく抱きしめ、大丈夫大丈夫、何度もそう声をかけ、甘い香りのする頭を何度もなでた。何も心配することはないよ。そう言って、包丁を取り上げた。

「悲しい話ですね。家族はなぜサメから逃げなかったんでしょうか」

「思考する前に本能で動いたんだと思います。家族ですから」

「そう、ですよ」

そこからまた二人とも口を開くことはなかったが、登には会話するよりも互いの想いが通じ合えたような濃密な時間だった。

「じゃあ、わたしそろそろ行きます」

「はい。またぜひお越しください」

責められるなり何なりどんな形でもいい。いつかまた父と娘として会話できるのだろうか。そんなことを夢想しながら頭を下げる。

深雪の姿がどんどん小さくなる。すると、いきなり立ち止まり、こちらを振り向いた。

「お父さん、またね」

大声で叫ぶ。それは耳の中に入って、体内で奔流となり、身体を蒸発しそうなほど熱くさせた。何かを手を持って振っている。それはネズミの姿をしていて、大きな鍵を背中に背負っている。

登はよろよろと水槽を背にして座り、目頭を押さえ、少し笑った。

「志穂、お前は本当に魔法使いだったんだな」

\*

ポンプでも入っているのかと疑いたくなるくらいにどんどん血が溢れてくる。もっと水に近いかと思っていたが、ドロドロしていた。

そんな下らないことを考えられるくらいに登は冷静だった。いや、自分は冷静なのだとなんとも脳に言い聞かせないと狂いそうになるくらい茫然とし、恐怖していた。

「あな……た」

声が出ない。頷き返す。問題ないと、お前の命は必ず助かるのだと。

「うう……ん。もういいの」

何がいいのだと、眉間に皺を寄せる。このまま泣いてしまいそうだった。

「もうすぐ救急車がくる。すぐだ」

十五年連れ添った妻は微笑み返すだけだった。こんなときもえくぼはできるのか。

「あの子、自分がわたしを殺したと知ったら」

「何も考えるな。何もしゃべるな。絶対にお前は助かる。深雪も大丈夫だ」

「ねえ、私ジャックに魔法をかけたの」

登の声はいよいよ妻の耳に届いていないようだった。死ぬ間際になって、幻覚が見えているのかもしれない。

「……絵本か」

「いつかね、ジャックがぴよんと動き出して、深雪を助けるの」

「何を――頼む。もうしゃべらないでくれ」

心臓の鼓動はいよいよ、掌に意識を集中しないと感じ取れないほどになっていた。

「こら、泣いちゃだめ。俊明と深雪は誰の子供？」

志穂は最期まで妻であり、そして母親だった。馬鹿野郎。誰に励まされてるんだ。

「……俺達だ」

首をほんの微かにゆっくりと動かし、片方だけえくぼを作り、微笑む。登はまだ温かい血の海に顔を埋めた。

〈了〉